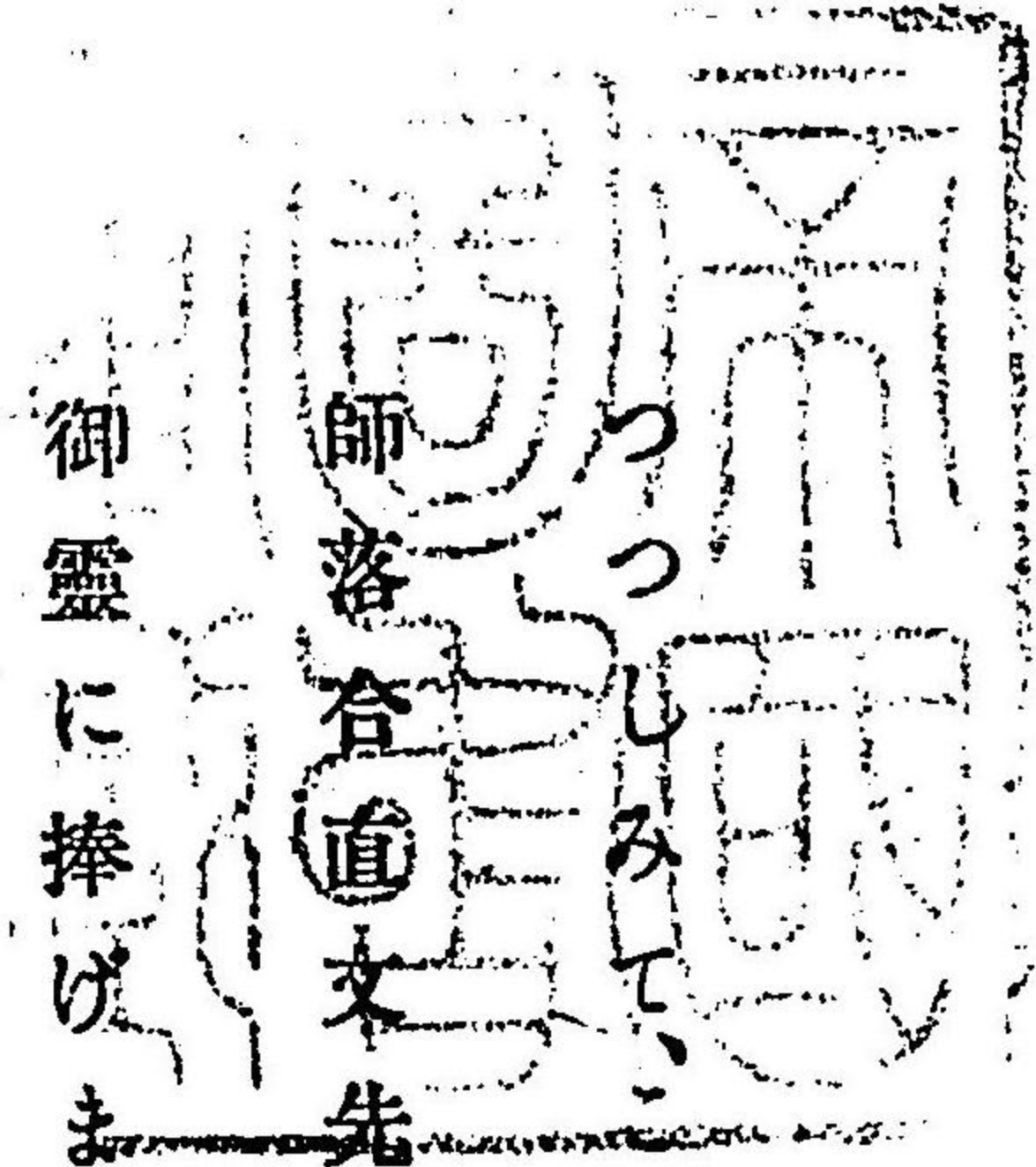


98-4



御靈に捧げま

つる。

師落合直文先生の在天の

つつしみて、のひと巻を、

明治
27 5 28
内交

毒草序

ホルバインの『骷髏舞』は精舎の壁畫なれば
措きつ、文藝の界にて凄愴の極を盡したる書
名を擧げむに『こぞの雪今やいづこ』と咏じ
けむギヨンの歌に『絞首罪人の賦』あり、魯敏孫
の漂流を語りしデ・フォウの作に『倫敦瘟疫記』
あり、スキフトが『幼兒屠殺私議』は絶代の冷
罵義憤を洩し、ド・クインゼが『英國食煙者傳』
『殺人美術論』も名に負ふ曠世の奇文なるべ
し。つゞいて獨逸にはホフマンの傀奇なる空

想顯はれ、亞米利加は更に悽慘の鬼才エドガ
ア・ポウを生みぬ。されど末世澆季の暗潮は前
世紀の後半に及びて益其奔流を逞うし、近代
佛蘭西の詩社に一大旋水を作して、モリス・ロ
リナアの『神經症』、バルベエ・ドオルヰイの
『妖鬼』等は皆愕かれぬる人心の狂瀾なれど、ポ
ドレエルが一代の詩集『惡の華』こそ其最も甚
しきものなれ。鐵幹晶子二氏の新作『毒草』も此
類のものか。

あらず、これは奔放の意を盛りたれど、鳩毒の
直に命を絶つ如きものにあらず、適夢幻の氣

を泛べて而も鴉片の心を奪ふ恐無し。清新の
調は既に卷頭の『絶句』に味ふべく、蒼古の姿、
日本武尊の『哀歌』に忍ばれ、源九郎の斷篇『清
水詣』はかゝる類の國詩中、明治新調の最も成
効したる作ならむ。加ふるに卷中收むる所の
小品は所謂詩家の文にして、措辭結構の奇、正
格の散文と異なるも亦一種の妙なり。されば
此『毒草』を以て近代佛蘭西の詩集に擬する
は謬れり、寧ろ現代英國の詩伯にしてまた散
文の名家たるスキンバアンが青春の作『歌謠
第一集』に比すべきか。以て凡俗の膽を奪ふに

足り、士人の意を強うするに餘あらば、著者の
本懐は達す可けれど、願はくは、之に第二第三
の集をつぎて、益、詩嶽の峻嶺に向はむことを。

明治三十七年初夏

東京 上田 敏

友の集成る。ひらき見て、ことばなし。たゞ
暗涙のすべなさを覺ゆるのみ。何の涙と
か、あゝみづからも知らぬを。そよ、これぞ、
世にそむき、人にそむきて、かくてたどら
むを命の、われらが、はかなきよるべには
あらざるべきか。

あゝされど、友よ、うらやましきは、君が上
なるかな。さにあらずや。たゞまことの人
生の意義、解せむをつとめよとはいふは。
あかもその解せむの一語は、君によりて、
そのまことなる、ゆゝしき意義を示され
たるにはあらずや。

さらば友、われをして、なほこゝにわれら
すべてが師とます、ゲーターの君の御こ
とば添へしめよ。

何人も命あり、されどそを知らぬが多
し。

そを解し得たる所、そこにまことの樂
あり。

友よ、われはあらためて、心から、われらが
詩神の御前に、君が生涯のみつかへの、ま
たくまことならむをこそ、祈りまつらめ。

辰どし若葉の節

内海月杖

毒草目次

詩文

與謝野鐵幹

絶句	(新短歌)	一
哀歌	(長詩)	八
蛇いちご	(短歌)	三八
おもひで	(長詩)	四一
竹	(俳句)	四四
荊叢毒蘆	(短歌)	四七
清水詣	(長詩)	五四
山	(長詩)	九〇
船	(小説)	一〇四
舊人	(長詩)	一三五

金蓮花	(短歌)	二六八
秋の夜	(長詩)	一七六
鳴鏑	(長詩)	一八二
あざみ草	(長詩)	一三八
飛鳥かぜ	(短歌)	二四二
春のひと	(美文)	二四七
菫藍	(長詩)	二五四
すだまの歌	(長詩)	二五七
夏草	(短歌)	二六三
禍鳥	(長詩)	二六九
君	(美文)	二七二
夢ごころ	(短歌)	二七九
涙の記	(美文)	二八三
旅順封鎖隊	(唱歌)	二九三

鳴呼廣瀬中佐	(唱歌)	二九八
自嘲	(短歌)	三〇五

詩文

與謝野晶子

金翅	(短歌)	二六
つみびと	(長詩)	三四
ひとぢ琴	(長詩)	三六
宵寝	(俳句)	四四
浦物語	(美文)	六九
やつれぎぬ	(短歌)	一三八
七日がたり	(美文)	一四一
橘媛	(長詩)	一六三
こほろぎ	(短歌)	一七七
母の文	(美文)	二一五
緋芍薬	(短歌)	二六〇



自

繪畫

(短歌)

藤島武二

三〇五

毒

草

(裝幀畫)

毒

草

(卷頭畫)

朝

(挿畫)

夕

(挿畫)

晝

(挿畫)

夜

(挿畫)

彫刻

伊上純藏





毒草



絶句

鐵 晶
幹 子
共著

ゆきずりにあゝただひと眸め、それもえ
にしや、あゝただひと眸め星ほしのまなざし。

わが戀は火中ほなかの車、かた輪ぐるまよ、た
だに怨うらみを載せて燃えける。

水出づる黒髪の花、透きて眞白に、君を
めぐるる瑠璃の夏川。

天みれば黄金星の夜、成るや此の時、眞
珠は海に歌は御胸に。

花ぐさに鹿の音にほひ、古りし寺々、金
泥ながす奈良の村雨。

よろこびは千載にいく夜、願ふはひと
夜、あまき口づけあゝ君この夜。

あゝよしや、肩に肘まさ唇は御唇に、こ

こは去なじな髪しらむまで。

聞の戸の月夜こほろぎ、汝れは樂童、こ
の寂寥を美しく奏づる。

山蓼や野菊や萩や、露の小徑に、かしこ
と指し、黒谷の塔。

わが歌は君をかざると、これやさし櫛、
天輝る地輝る玉のさし櫛。

鶺鴒のごと白きひかりや、ゆるせ少時、お
もふは今よ君がまぼろし。

朝顔の露の末花、なほも秋姫、うつろひ
隠す小さき紅皿。

黒髪は肩にみだれて、うしやさし櫛、わ
かき愁を掩ひかねつも。

君を得て足らひし今日も、ゆるせ少女
は、君に頼よせよ、と泣くかな。

あゝ今は消ゆる花夢、寒き沈黙に、古り
し御堂の像のごと寝む。

君を見し牧の通ひ路、さりやその日の、

わかれに摘みしひるがほの花。

衣通りて地に曳く光り、君よあえかに、
えこそ忘れね泌みしおもかげ。

君が詩よ火焰の疾風、戀に羽搏てば、あ
なや捲かれて我もむせびぬ。

薺花に眉根つくろひ、それも昨日や、切
にこの人君を思ひし。

木がくれの甘き無花果、さりやわが戀、
母の乳なして人は知らずも。

夕つゆに殿あむ小蜘蛛、やさし願ひや、
星の一つを地に齋かめ。

紅梅が縫ひし花笠、内に誰ぞ在る、君に
よく似し王子うぐひす。

母神はかしこにいます、あらはせ御名
と、藝の子なれば、鑿もて参る。

星めぐる天のおばましま、さらばその
宵、わするな君とうるむ瞳や。

ゆきすりの名知らぬ、微草、汝もわりな

や、手ふれて見れば色に染みける。

君戀ひてなづむ若子が駒に食ますと、
和泉に長き青草の路。

春山の小谷の水にちるや、小椿、孔雀尾
なして青渦わきぬ。

紅梅にしろき鳥飼ひ愛づる十五が、う
はなり嫉み美しくしきかな。

春海にしら羽かげさし光いてりて、君
とわれ載せ、歸る鳥船。

玉ならば奈良の京ゆく君がかざしに、
まら鷹ならば狩の手上に。

— 鐵 幹 作 —

哀 歌

(人々と聲を分ちて日本武尊を歌へる中より)

—

またたけば千載と過ぎし
舊事か、はたや昨日か
今日と云ふ近き現か、

晝の夢あかつきの夢
小夜の夢、夢つかさどり
人の界にきたり天はせ
飛ぶ神の羅ごろも、
うち被さうつらうつらに
見し夢か、心うつけて
委曲にえこそ覺えね、
おだしくも圓らに肥えて
牡牛なす真白き猪の
吾が越ゆる伊吹の山の
行く道に反芻食む如も
よこたはり遮ると見しが、
残りたる樹下の雪の

春の日に融けて形なき
ありさまに且つ消えにけり。
この時よ如何なる遠か
聲ありて『真北の海ゆ
志那都比古氷雨を誘へ、
霧の神大戸惑子
妹脊して天の闇戸ゆ
舞ひくだれ、今』とぞ叫ぶ。
『お』とばかりおなじ應諾は
寝る鳥の羽搔くごとく
ひそやかに幽かに響み
山脈を憾れば、やがて
盡惑の垂りぎぬなびけ

舞ふ霧は嶺谷を掩ひ
鉛箭の百千箭なして
氷の雨はしとどと降り來。
これや此の石長姫が
幽宮氷目屋の内を
透き見して、然しも醜めき
顰む眼に觸れぬる時し
人みなは凍え慄き
立氷なし氷柱石なし
氷るてふ禍殃見るか、
御伴等の剛者どもは
倏忽に心利放り
身は冷えて路に臥しぬ。

あなさては美濃の古山

伊吹山年へて栖める

禍神の伊吹醜男ぞ

吾を遮へて禍殃ふらしも。

『さかしらや、空手に捉られ

人の界に率ても往なる、

恥知れ』と頬に笑み浮べ

高らかに呼ばむとすれば

こは如何に咽喉ふたがり

音は出でず、搏たむとすれば

枯木なし、小手冷え萎へて

踏む脚も舵のごとく

ちからなく蹶るこそ跳れ。

このたびは最けざやかに

聲ありて『あはれたもしろ

あれ見すや小確の尊

冥護にと姨が佩かせし

神寶劍はいづら、

空手して禍妖の坂

今過ぐる、疾く此處過ぎよ

よき門は前に開かめ

幸ありや、ひゝら、ひゝら』と

笑みつれて拍手うちかはし

舞ひ唄ふ者のけはひや。

やがて突と大地裂けて

くらがりの真洞の道に

反轉び墜ちし驚駭、
閉ぢし目を開けば彼方
千足踏む遠き彼方に
いと小さき青の光
愁はしの一つ火もゆる。
もゆる火に足困みながら
ちかづけば、そこには一人
慟哭ち涙ながれて
まら髪も濃鈍の衣も
うち浸りしとどと濡れし
姫居て、諸手を面に
ひた當てて俯伏し泣けり。
吾れぞ知る、姫が名こそ――

人の界に陰あるかぎり
もろもろの禍殃盡きず
貌佳きも力たけきも
情あり心賢きも
うるはしき時に遭はねば
あなあはれ、七里わたし
香る木も悪木にまじり
へろへろの麻幹にまじり
朽つること、秀れし人は
佞人の嫉妬のしたに
愚人の嗤笑のなかに
恨言だに云はむすべ無く
衰へて過ぎも行くかな、

そを歎きそを悲むと
青山も枯山に成し
泣き枯し千船うかべる
海河も啼き涸すてふ
泣澤女さには有らぬか。
言ひ知らず吾が胸寒き
凄涼と幽愁おぼえ
立盡し姫がさまの
おはれさを打目成りしが、
彌更に八千尋ふかき
根の國の巖のきざはし
ひと足に一節謠ひ
列なめて上りかも來る

細き音よ、蘆の枯葉の
夕霜にわななくがごと、
うらがなし、朝没る月に
邊つ浪のささやく如して、
『好き凶日、今日の凶日も、
満ち足らひ麻賀禮わが國、
大王はひと日が内に
人の界ゆ千頭絞り
血に塗えて持て來と宣らす、
乞ひ禱むは千五百の産屋
人の界に日ごと増りて
死人の盡きすあれかし。』
聞き知らぬ悲しき歌の

如何にぞや颯と止みぬるに
目路移し素焼小皿に
黄楊櫛の津間櫛燃ゆる
一つ火の彼方を見れば、
死鳥の鴉羽色の
伊那志許米穢き闇に
山道の真洞つづきて
黒がねの透戸を鎖せる。
透戸には如何なる人が
雄心を失はざるや、
影のごと瘦せてさびしき
眞素肌ますくに衣も掩はず
黒髪は疎らまばらに細く

その末は脊長に餘り
底知らぬ關に引くらし、
挿頭かぶには眞白ましろき薊あざみ
蛇之比禮へいれ亂して挿し
おのがじじ透戸に立ちて
言葉なく唯愁はしく
ほくそ笑み此方見やるは
歌のぬし黄泉醜女等。
見るからにいよよ昏迷と
吾がこころ力うしなひ
水沫みづなまなし淡雪あはゆきなして
現身も今か消え行く、
『あら憂し』と塞ふさげる息に

呻吟く時、翡翠色の
うるはしき羽衣つけて
十あまり二つを蹴えぬ
うらわかき清き童男の
風のごと突と降り來しは
天なるや神の眞名井の
御水取司水分男、

『いざたまへ、こは神の子の
少時だも在すべきかは、
蛆多加禮斗呂呂岐てなも
伊那志許米志許米岐境
出雲なる穢き國の
黄泉國伊賦夜が坂に

行きかよひ曲道つづく
名は喪山。——そのいにしへに
手弱女の下照姫が
亡き夫の天若日子を
葬ると出雲の國に
喪屋つくり日八日夜八夜を
哭泣きしが、吊らひて來し
姫が兄高日根子はも
その容姿の天若日子に
甚能くも似かよひたれば
過まりてその父のらく、
『吾子が妻は伏び歎けど
吾子はなほ死なで在りけり』

こを聞きて比賣が兄は
白眼して甚いきどほり
曰ひけらく、『我は麗はしき
友なれば吊らひ來つれ
何しかも我れを穢き
死人に比らふるや』と
御佩せる十掬の劍
抜きもちて喪屋を切伏せ
八束穂を鶏の食むごと
御足あげ蹶ゑはららかし
離ちたる喪屋は飛び來て
美濃の國藍見の河に
化りけるはこれの喪山よ。――

死の神の饓代招ぐと
日も夜も黄泉醜女は
ここに來て穴戸に居寄り
透見して人の界望む
あな穢な御足反せ』と
いふいふも吾が手ひきしが、
たちまちに童男は消えて
こは何處母の乳汁と
うるはしき清水流るる
丘の邊の日の夕暮に
吾は一人立つか有らぬか。

吾が心は空虚よ、あな憎憎、

こは夢かも、いかにぞ胸ぐるしき。

忘れ得ぬその歡喜——彼の尾張に

眞玉と見てし女が手の夢ならばや。

高御空も(死ぬ身にあゝ甲斐なし)

翔りてなも往くべき意勢はや。

別れに置きし少女が小床の邊の

嚴の太刀はや、太刀はや、そも有らなく。

玉倉部や玉なす清水がもと

今杖たて掬べば心ややに

寐めぬる覺ゆ。あらしよ、こは限りの

寥しきゆふべ。吾が眼に靡く黒雲。

青垣山ごもれる高原の上

濃き緑に吹き滿つ初夏風、

父の帝の大和は國の眞秀靈

美はし、戀し、いつの世そをまた觀む。

世に息延へ命の全けむ子は

明玉はや瑣瑣に美須麻流垂れ、

光裳ひける少女と手執りい行き

平群の山の櫛の葉鬢華に挿せや。

憂き國見し汚穢に身は病み朽ち
あな石なし心はいよよ冷ゆる。
人としあれば甲斐なや現人神
ああ人のごと今はも吾は死ぬらし。

— 鐵 幹 作 —

金 翅

肩を垂れ裾にそよぎし幾尺は王が手
にさへ捲かれじなとも
親もすてぬ神もいなみぬ夏花の外に

趣もたぬ人の君ゆる

かへりみれば君やおもひし身をやめ
でし戀は驕りに添ひて燃えし火

棲みて三とせ後は百とせ中のひと日
犠牲にたまへと來しや寂寞

こがね矢をそびらになせる神將がむ
かふ軍か君が行く奈良

集とりては朱筆すぢひくいもろとが
興ゆるしませ天明の兄

友染の袖十あまり圓うより千鳥さく
夜を雪ふり出でぬ

わが春の笑みを賛せよ麗人の泣くを
見すやとひまなきものか

牡丹とよぶ花にまされる子ならむや
戀がよそほふ春の大王

湯の宿や霧にとられし朝鏡山にいね
しをわびても見たる

丘の上の有明月夜草の笛つらしとわ

れをいにしにもあらず

われと歌ひ自らほろぶいのちにも似
るものなきを誇らせむとや

二十すでに君におもはれ道の子に否
とこたへし名にやはあらぬ

春の花はいまだ梅のみしろき山人の
子ばめのおん歌おほき

少女子のおもむきあるをわがなふと
玉の御座を賣る子もあらば

自らをよしとたたへし百首歌あかす
おぼさばかすそへ給へ

鶯は餘寒のとばりあつう鎖し朝ぬる
窓はよぎらぬ鳥か

なほ戀ふとやのろひの弓の弦に長き
琴の緒だきてまどへるのみぞ

あゆまじと柳をひきぬ眉のあたり君
が口なるにくきわが歌

紅梅の花櫛すがたいつきえて二尺に

たらぬ袖御眼なれし

野をおもひ牧場をおもひやはらかき
羊に似たる眼おもふとありぬ

相すまむと待つまもはやく今日のき
てわれのみものは思ふおとろへ

君を戀ふとこれ歌ならず君を戀ふと
君えて云ふに人わらはむか

一應書物主人の山

御兄に水仙いけむほそゆびの御つめ
染めこよわが京の紅

神を知らず道をならはずわが魂はい
と幸さいはひにはぐくまれにし

もとよりなり天女てんむすめに似しはよきかた
ち君をいだくはわが右手みぎて左手ひだりて

歌かずあれ畫師えしにあふ日は畫をこそ
と姉がのろひし扇と妹

君が歌はこの春の夜に似ると召しぬ
わが師とよびし美しくしき人

戀を歌ひまどひに沈み罪におちかく

てうとまぬ神をのろひぬ

たえなむとしわれだに知らぬいつは
りが時をつなぐと知りそめし戀

松が中なかの花にぬかよせ耳をふる白の
御馬みまをよしとおもひぬ

ゆるされて水ふみわたる春の野やあ
らぬを富士と君もまどひし

おくがれやこころの欲ほの美しくしき飢
ゑすくはずば罪おひまさむ

少女なれば脈に華はなさく夢は見しわが
身おつるを戀とやおもひし

伯母が寺愛宕あたごのふもと鳴瀧なるたきに椿つばきひろ
ひてあらむ世なりし

晶子作

つみびと

わかきをよびてつみ人と
君よび給ふつみ人が
五つのゆびはふるる緒に

34

ものの音をひくちからあり

35

とけては朝のみづうみに
むらさきながすわが髪や
みだれてもゆるくちびるは
ここにまた見る花のいろ

君よ火かげにすかし見よ
君がぬかづく神いづこ
寺に古りたるしらかべの
聲なき晝ひるとは何れぞや

かくもいみじきつみ人の

ふるさとこそは君しるや
はたまた美をつみ人と
名づくる國へつれこしや誰

——晶子作——

ひとぢり琴

もとより琴の緒にしあれど
うらみにひくき音もごもり
のろひにたかきおともせむ
ほそ緒しら木のひと柱琴
君ふれ給ふことなかれ

35

もとより戀の琴なれば
はだやはらかういだかれて
さくべき胸のささやきを
あこがるるともしたふとも
ああ君ふるることなかれ

37

ひと緒の琴のわが戀は
ひとりの人にふれてより
やむよしもなき音は高う
戀にうらみにある時は
人をのろひにやすきひまなき

——晶子作——

蛇いちご

聴法や龍女もまじりおはす夜か横川
は鐘にしら梅のちる

をさなうて母とわびにし里のごと涙
もよほす戀古りにけり

いささかの白髪は見ゆれ業平に或は
背つとも啓させ給へ

まろびてもをのこをさなく泣く日な
り黒髪おちてなびて御足に

わが歌にしら衣かへし舞はぬ子は牡
丹が根にぞ斬りて棄てまし

門出づる女ぐるまや施主の君小室は
暮れて緋ざくらのちる

姫親王の御集にのこる君が名と史官
が諱まぬ御代まち給へ

京にして九郎が得たる静かと古りぬ
る旅の日記おどろしき

むらさきの御袈裟かづきて僧都らが

まろ寝よろしき春の大原

この男御酒もたぶべし雛君にざれ歌
申す器量はべるに

はづかしき尼そぎすがた京に来て舊
りし紅屋が主の柩守る

やまとにて観るも美しくし徐氏が子に
折りてかざしし春の花牡丹

妻が髪のおとろへ思ふわびすまひ
男なれども泣くを咎めじ

40

五つより蓮月が手に丈のびし兄の阿
闍梨も老の見ゆるかな

わが歌は法師愚庵に秘めたまへ父の
如くも怖き顔せむ

藪つばき今も多かる若王寺狸でると
て母に添ひし路

— 鐵 幹 作 —

おもひで

七いろの霽もて掩ひ
まろがねの樂に送られ
風のごとまぼろしのごと
いづこより來るおもひで。
星月夜百合さく空か
青潮に雨ふる海か、
細おもて清らに瘦せて
黒髪の身に泌む姿。

汝を見れば心は躍り
汝に聞けばむかしは戀し。
にがかりし、つらく泣かれし
戀のあと、世のあらそひも、

うき人も、忘れし人も
のろはしく怨みし事も、
汝が神の語るを聞けば
みな戀し、なべて美しくし。

姉神の『夢』にまさりて
くしわざはいともさやかに。
おもひでよ、汝が笑むしたに
うしなひし光は還り、
さづけぬる汝が手の上に
あたたかき涙ながれて、
わびをとこ、なさけ冷えたる
堅石の心は和ぎぬ。

世の中を況して思へば
戀なくてすがれし姫や
尼すみやのこりし妻や
たをやめのやさしきどちは
汝れをこそ嬉しとたのめ、
夜に晝になぐさめがてら
やは羽うちおとづれて行け、
なつかしの女神おもひで。

— 鐵 幹 作 —

宵 寝

45

小盗あり、澁谷が貧居に忍ぶ。剩す所
ねまき一領、殆んど遺憾なし。活東見
舞に來る。席上の即興かくの如し。

鐵 幹

盗人に春の寝姿見られけり
盗人の逃げたる宵や花曇り
妻がきぬ雛のきぬも盗まれぬ
若かりし盗人と思へ桃の朝
盗人は五里を柳に落ちけらし

歌反古に春なる宵を小盗人

盗人や撰者と知らぬ春の宿

菜の花を分けて去にしや小盗人

盗人の訴状むづかし春の雨

晶子

盗人に宵寝の春を怨じけり

盗人に雛を誇る寝顔かな

46

47

雛の灯に盗人を追ふ夜半の春

戸まで具して雛を捨てし盗人か

雛の句は袂ながらに盗まれし

盗まれし紫繻子や節句の帯

荊叢毒蘆

病こそ高き窓なれ観るによし世やは
小さき我や大いなる

ふたりなる世の煩悶の後腹やまひは
賢し信は幼なし

日も夜もちから上なき大みかど病い
つけば襟あはさるる

病みぬれば人もかわゆし我も欲し熱
き涙の流れぬるかな

許し給へ今日に執するわが一日病ま
ぬ十とせは價なかりし

まら隼が創おひて眠る山岨の杉の夜

かせと死は人に寄る

病める身は戦ひ負けし城のあとのこ
る瓦か才かれし歌

まら雲は空ゆく人は病ありこの日こ
の時死なぬわれ見る

死ならずよ人は如何にぞ生くべきと
耻ぢぬいのちを思ふべかりし

春潮の青きに浮び行く船の圓き帆の
ごとわがこころ足る

博士らにひだりの肺の血は分けむおもひ得たまふ事おはすべし

魔ちからのしたにいのちの火は燃えぬ死よ謝す君がくろがねの鎚

戀ありて詩ありて嬉しひと日だに病めば光明の満たぬ日は無し

ますらをはこの大地に使しぬ歌ひ花うる飾らで往なめや
(以上十四首病中の作)

雨の日は春の蚊いづる清瀧やもえぎ

蚊蠅うつ山ざくら花

哈爾賓は少女齊々哈爾酒によし哥索
ことしも北に還らぬ

芍薬は似ず緋牡丹や近からし京のを
とめが扇さす襟

父君になさけ能く似しこの爺が手向
くる歌は毬にのらぬか

母ぎみよ雛の籠をさぐりませ小さき皇
后のふえておはさむ

美しくしき六歳の女王とそだちては弟
たちの中に光りし

これよりは父が帛裂く荒歌に花ちる
春の悲愁添ふべし (以上四首大矢正修が愛女の喪

にこもれるに)

君が家の戀は清淨しらぎぬに白百合
おほひ神の手づから

世に勝てと我は男子につくられて今
日たまはりし美しくしき妻

もゆる火の火中にさぐるしらはちす
猛者には猛者の戀を得しかな (以上三

首真下飛泉の新婚に)

千曲川みぎはみぎはの戀がたり江戸
の作者が興おもふべし (谷活東の信州に赴くに)

あがなひの六とせの後は神ぞ知る光
明に歌へ新しき生

うらわかき友の面さへ奪ひぬる王が
地上の獄を讀へむ

ますらをは六とせ牢獄いとやに子は幼こな才さい
女才ぢさいゆる瘦せし世ならぬ (以上三首友の六)

とせの獄より歸れるに、妻きみ某女詩人の許まで寄せたる)

— 鐵 幹 作 —

清水詣

(源九郎義經の幼時を歌へる)

家門は平氏、地は平安、
時は平治ぞ、天に謝せ。

54

村鳥むらどりしのぐ白鷹しらたかの
英姿きよさ猛まなる左馬頭さまのかみ。
天魔てんまや魅み入る、おろかにも、
不覺ふかく人なる瘦公卿せうこうけいの
信賴のりぞりばらに加擔かたんして、
我から首くびを持もて來くるは。

55

まやつ、小童こどうの悪源太、
親おやを見真似まねの雑言ざつげんか、
安倍野あべのに來れば、出迎でむかの
三千餘騎さんぜんじゆきは影いづこ。
待賢門たいけんもんの夜あらしに、
矢聲やこゑたかきも興きんこそ有れ、

二

まじる雨雪とちりぢりに
消えを急ぎぬ、源氏がた。

入道太政大臣の
鎧のうへの緋の法衣、
帝を掩ひ、世を壓み、
最ふくよかに見よげなれ。
公卿將相、一門の
榮華の花に、釘ひとつ
打つ子もあらば招せむと、
紅衣の童子眉やさし。
入道殿のおもひもの

常磐の前が、清水へ、
微行詣の日は今日と
洛中こそぞる五條坂。
被衣、伏目の小女房、
銀鞍、頬赤の田舎武者、
車ひかせて、巻纓の
公卿も混り見ておはす。

彌生の空の眼も彩に、
柳の萌黄桃の朱や、
紺青ながす加茂の水、
淡紫の山の霞、
さながら京は、錦もて

七重につつむ繪巻物、
一枚くれば、金泥の
清水詣あらはるる。

あはれ、まばゆさ、華美さ、
これや微行か、六波羅の。
褐色、葡萄染、水干の
色まじへたる五十人、
御酒たまはらば、一さしを
柳かざして舞ひぬべき
うらわかげなる雑色ぞ
群れて、先追ひ、後追へる。

女ぐるまの貝すりに
黄金の紋は揚羽蝶、
(内ぞゆかしき、玉だれの、)
鳳凰繡ひし出だし衣、
だんだら綱に牛かけて
いと徐やかに、長閑やかに、
この一しきり廻る時
春日も伴れて轉るらし。

二

「富貴の門に、指かみて
狗を羨む痴者の、」

他人もさぞやと、汚れたる
己が心に推しはかる、
斯かる歎ちたき世にありて
切に我こそなげかるれ、
心ふかかるとも
やはか知るべき、わが今を

頼みきこえし頭の殿
わりなきなかを訣別れては、
おくれまつりし女子の
羈絆は重き恩愛や。
母が命をすくひたさ、
遁れし宇多の里いでて

復も都へ、有ることか、
讐敵の門をくぐりたる

母がいのを赦る上に
三人が子をも助けむと、
(鬼の口なる花はちす、)
嬉しと見しは仇なさけ。
引かるとは無し寄ると無し、
無體の戀もつひ其れに、
荆棘を抱く心地して
わが夫ならぬ夫がさね
心は故殿に、身は亡骸、

御後逐ひても死ぬべきを、
これ煩惱か、迷執か、
女人輪廻の罪業か、
忘れがたみの牛若が
前途猶も見まほしく、
笑みさへ作れ、六波羅の
黄金の柱、身は瘦せて

今日の一日の山詣、
まことは過ぎし頭の殿
後世安穩におはせとて、
冥福いのる我が供養。
極悪底下の女人さへ

救ひ給はむ本誓に、
縋りてこそは、喃薩埵
汚れぬる身も参りつれ

憶へば、妾九歳の
夏にぞ覚えし普門品、
十五へかけて、月ごとに
三十三巻読みまつり、
十九二十は、年ごとに
法華經百部浄寫しぬ。
今も日毎に、端嚴の
三十三體繪にぞする

あゝ我が薩埵一生の
信心功德ことごとく、
慈悲のうてなに廻向して
二つの祈誓こめまつる。
いかで故殿の成佛に
利験のひかり與へませ、
これなる童髻牛若が
現世の福に障りあらずな。

三

柳の袿やまぶきの
唐衣すがた優なるに、



IIIA

心にくしや、紅梅の
おん衣重ねて數しらす。
丈の黒髪、あなかしこ、
下座に曳いても行くものか。
檜扇もるる容顔よ
是しら梅の凝る所

九條院の中宮に
よき女房を召されしに、
天が下なる稀びとの
千人がなかの百を選び、
百のなかなる十人選り、
十人のなかの第一と、

選まびに入りし此の君を
あゝ顯證しやうじやうにも見まつると

こは可憐かひんの少人せうじんぞ
當たう歳さい六むつの牛若君うしわかみ、
白綾裁しろあやたちし狩衣かりぎに
むらさき末濃すゑのうの刺貫しき貫や、
童わらはすがたの美しくしう
羞はぢて隠るる母が袖、
女房二人にようぼうふたりに手を執られ
御堂みだうに上る春の書と

六孫王ろくそんおうは跡古あとふるりぬ、

白河殿しろかはどのにわが父の
舌捲したまかせつる爲朝ためあさを
伯父おぢと仰おほぐも愉快うきげし。
八幡公はつぱんこうはほど經へたり、
待賢門まちけんに重盛じゆうせいの
膽冷きんひやしつる義平ぎへいを
兄あにといつくも心地こころよと

母は二十四、うれひては
少し憔悴せうさいの見ゆるこそ、
玉たまを相あする貴人きじんが
瘦すくせて死ぬべき姿なれ。
小人せうじん凛々りんりんしき眼眸まなこは

源家の血なり、聲ひそめ、
これ獅子の兒を野におくと
驗者おどろき訴へま

母子しづかに、參籠の
道俗わけて進むとき、
あはれ、微妙のうしろ影
圓光かざすけはひあり。
末代稀有の影向と
今日の御堂に拜むもの、
本尊薩埵の外にまた
この二菩薩や加はれる。

斯かる殊勝の結縁に
遭ひぬるものか、忝けな、
山に餘れる老若の
貴賤群衆手を合せ、
七條かけし大徳の
僧都の坊も珠數もみて、
隨喜に湧ける感涙を
雨しづくとぞ流しける。

浦物語

(上)

「美しくしき物語きき給はずや。」と、人避けし松かげより出でて、再び並べられし肩の細うやはらかき、藤の花染めし水色絹は美しくしき線見するよと、助教授の君見おろして思ひぬ。

『わが問ひ撤回させむとのたくみには乗ら

少女、

「君に答の猶のこりありしを忘れぬ。されどわが語らむとせしも、彼の夫人の上の事なり。」やうなだるる頸に、「正直なる君かな」と手かけて、

『たはぶれなりしをかをるの君。』

「彼の人を世にまた無う美しくしと見るは誰も々々もかはり無し。」

猶ほ瞳子は白きいさごの上のみに注がるは、バナナの香まじるやはらかき息の、餘りに近う額髪吹くためと云ふことわり知り給はぬ助教授の君、
『かかる時ものうげに語り給はむには、美しくしき戀がたりも、わが耳には、許るし難うし給ひし君が伯母君の、われ諭し給ひし時と同じ心地に悲しかるべし。見たまへ、灯はとぼりぬ、兄君の間の欄干に。』

「灯は美しくしきものかな。」と幼なげに何ごとも忘れし如く云ひて、

「われ此處へ来て灯の美しくしき覚えぬ。かなたは何處ぞ、昨夜もまた明日の夜も君眠り給ふ市の灯と云ふを知りぬ給ふや。」

一しほ近う寄り添ひて、さて腕かみなごしに松原の方かた、わが旅館やどの階上の灯を一つ二つと數へて、

「君は誤り給へり、彼の灯はわが部屋ならず、園岡子爵の間なり、彼の夫人の間なり。」

「さらば我等があとを兄君は追ひ來給ひしなるべし。我等が物語に幸あたへむとのみなる君も、一人は堪へ難うなりしなるべし。」

「あらず、彼の夫人と夫人の愛子あいしの彼の旅館に在る限り、兄上に寂寥の感なかるべし。大學に鞭とりし日より、都會の病院に在りし日より。」

「彼の黒き瞳子ひとみ、すぐれて房やかなる髪は、河原木ドクトルにさへ物愛めづる心起させてや。」

「長き黒髪よりも、彼兒がたをやかなる頬こそ、

伯林より歸りて後、いづくかへ潜みゐし兄の血を探りあてし貴きものなり。」

「ドクトルがこの旅寢には、彼の人の寫眞を伴ひ給はざりしか。」

「わが行李へと云ひしを、兄は苦笑して止みぬ。兄が三とせの胸の苦しかりしことは、われ園岡夫人への物語にて聞きぬ。そは我も疾く推し量りるし想ひなれど、彼の人の口よりは初めてなり。」

正雄は思ひ出せしやうに、

『子爵はいつ京へ歸り給ひし。』

「昨日をなりしか、來給ひて四日目なり。」

『如何なる人がらにや、君は屢々語り給ひしか。』

「廣瀬伯を知り給ふべし、ただ彼の人なりひたひ額。」

のや、禿はげ上りし形かたちも、また夫人を限り無くもて
なすさまも。」

『何と云ひ給ふ、廣瀬伯をそのまゝの老人とや。
彼の夫人が年齢としを聞かせ給へ、麗人れいじんがよはひぞ美
しき。』

「十七とや見給ひし、二十たちはわが來年なり。」
海より來し風はこの時ひだりの鬢をしどけなう
して過ぎぬ。

櫛さぐりて撫づる間を、南のかた加太かたの岬みさきの遙に
淡路の由良が崎と瞳子ひとみあはすなかを、虹に似し雲
淡うすう懸れるを眺め入りし男の袖ひきて、

「されど麗人れいじんが老いぬよはひは此後にこそ見
め、羨まめ。今は猶そのまゝなるよはひぞ美しくしき

二十二となり。子爵は四十一とぞ。」

『二十二』と正雄はただ斯くつぶやきぬ。

「さるなかに得がたき戀の生ひし初を知り給
ふや。美しくしき物語とは其れなり。猶きかじとし給
ふか。」

『われさる美しくしき閱歷を持てる子爵を知ら
ぬこと悔やし。相見て後きかば、一しほ興は深かる
べきに。』

「わが物語に子爵は餘りに用なし。」
かをるは男のいぶかしみ惹ひきしわが詞を自みづから
笑みて、

「怪しみ給ふな、われは正しからぬ戀かたらむ
とするにあらず、神の持ちこし最も正しき戀語こひごたせ

むとするものなり。聞き給へ。夫人として子爵の間
にかしづかるゝやうになりしは、彼人十七の秋と
ぞ。おなじ京に生れし同族の姫、帳のおくに乳母侍
女の手かたちに容かたちづくられし新婦は、世の中の何事をか
知るべき。戀も、愛も。そは人として最もさびしき事
と思ひ給はずや。そのさびしさをさびしとも感ぜ
ず、四年よとせすぐし、春より身ごもりぬ。我が兄に夫人
は語りぬ。去年こぞの夏となり、いと暑かりし日の夕、例
とて大きな合歡くわんの木のもとに椅子二つならべ
たるを、子爵のさそひ給ふを待たず出でて、日に切
なう成る胸より苦しき息いきつきある時、おもしろき
もの見せむと子爵は手にせし物を卓の上におき
ぬ。夫人は眉ひそめて、紅きすぼん着けし士官が女

に戯るる畫のみ多き雑誌にや、我は今胸の切なさ
にえ堪へぬなり。子爵はや云ひたまふな、君に受け
し曩なほの日の辱はづかしめを償ふにあまりある畫のみな
り、見給はずや、泉に手くみて遙なる空のあなたを
仰ぐ少女をとめの清らかなるを。古代の鎗やりもちて戀人を
守る猛者むさしの雄々むさししきを。よき畫かなと夫人は初め
て云ひぬ。そは此國の鹽原の溪流いづみに似し山峽やまがせの景
なりし。さて二頁三頁。想ひ給へ、このあひだの時間
こそ夫人が戀と云ふもの愛と云ふもの知らざり
し二十年の最終さいしゅうの時間なりき。聖母マリアの後ろ
に負へる榮光の環わこそまばゆく前に披ひかれぬれ。
そのかひななるは何。うまれしイエス、みづからが
指吸へるイエス、最もをさなきイエス。この時夫人

が胸は大洋海の浪ひとつ揺らぎし響して、さて堪へ難う心ときめきぬ。と思ふ思ふ血はうしほの如く頬に額にのぼりきぬ。あやしき心地に夫の手に口つけし夫人は、今母となる愛を覚え、夫子爵は初めて妻の戀を得ぬ。これより後は君の描き給ふに任かすべし。彼の一家の人人は今最も世に幸福なるべし。神のめぐみの飽く所なきを感ずる人人なるべし。」

『待ち給へ、さらば彼の夫人が神に謝する詞を我にまなばしめ給へ。斯くぞあるべき。(この子が父を夫とするわれ。)猶つづけしめ給へ、(この子をさばかり愛づるドクトルを友とするわれ。)』

「君は無神論者にていませしか。」

『をかしきこと云ひ給ふかな。われに君得させし神に、わが信あさしと云ひ給はじ。たゞ告げまらせむ、われ君を得るまで、をんなの堅き愛なるものに信を持たざりき。』

「をんなの戀に。」

『さなり、君をおきては今も或は然るべし。されどわれは子爵夫人が戀なるものを信せずと云ふにあらず、たゞ子の愛より分けられし戀を受くる夫とこそ。されば表つくり見給へ、わが子を愛づるドクトルとの答をわれに否み給はじ。』

「はや我に要なし、君が云ひ給ふ所をよしと、われ強ひても思はむ。君と我とは一つのものなれば。」と口疾に云ひしは、旅館の裏木戸にからめる夕顔

の白きが目にさやかに映るまで、近う來しを知りて、週毎の土曜をここに兄妹たづぬる理科大學の助教授、いま講習會に大坂に在る立波正雄と語るひまの早すくなきを知りければなり。

『しか思ひ給ふか。』と正雄手をかたうしめぬ。仰ぎ見るまなざしの美しくしき此の燃ゆる如き色は、世に限なき人として持たじ、ただこの人の兄ドクトルのみ同じ瞳子は持つなりと、正雄の心みちぬ。

(下)

大鳥神社の杉に落雷せし日より三日経て後の大雨の晝より、幼き重光はいと能う泣くやうに成り

ぬ。夕となりては青き筋額にあらはるるまで。されど未だ妹具して中の島の官舎の伯父訪ひにと昨日出でしドクトルは歸らず。昨夜ぞ夫人のために極めてさびしき夜なりし。今日もまたわが友この子の友なくて過すべきかとは、今朝夜あけてよりの夫人の思ひなるを、今重光はこのさまなり。この次の瀛笛のひびきにあはせて待たむに、ドクトルの君歸りき給はずば、堺へ人やるべし、醫迎へに。乳母に斯く云ひし夫人は、あらぬまで聲みだれたり。難波和歌山間の汽車の笛は、一時間々々ごと。に後ろの松山をおとづれぬ。されとドクトルは未だ歸らず。こは必ずかをるの君がわざなり、妹の君にすゝめられて、歸さを彼の艶美しくしう刺りし友

と共にせむと、土曜の明日の夕まで留まらしむるに非ずや。乳母に抱かせし子を上より見横より見て夫人はドクトルを待ちぬ。ことわりなう、妹の君をうらみぬ。漣笛なりと、甲斐なしと知りつゝ、獨ごつ乳母が聲は、くるほしき夫人をしばしやすらかに爲す力あり。

「八時五分のにていませしか、さらば次は早や終列車なるべし。」と、こなたの廊の前を旅館の女に導かれ歸るはドクトルよ。

「あな。」と走り出でしは夫人の侍女なり。忍び泣の聲をドクトルは早くも聞きぬ。

『夫人は』とあわたいしう呼びて、簾障子の外に立ちぬ。かをるは静かにその後ろに。樓の女が手の

燭は物に驚きしドクトルが横顔を青じろく照しぬ。

「わがドクトルの君入り給へ、わが夫の我等母子を保護し給ふ君と頼みきこえしドクトルの君。」と忍び泣の人は簾障子近うるよるさまなり。かをるは樓の女と共にわが間に歸りぬ。

幼子の病は夫人が思ひしよりも、初めドクトルが思ひしよりも、その夜の夜なかとなりてはげしう成りまさりぬ。もとより腦の病なり、かばかりの幼子にあるべき事と、ドクトルの絶えず心づけし病に外ならざりき。二人びきの車にて夜の二時すぎ此處に着きしを子爵と知りて、かをるはいとほしと思ひぬ。堪へ得べくもあらぬ大きな病に、今は

泣く音さへ幽かになりし愛子を、小さき臥處に見
む時、美しくしき妻の半ものぐるほしう魂ぬけし人
のやうなるを見む時、子爵の心いかならむと十疊
の間に獨り坐して思ひ居たり。府立病院の院長と
今ひとり髭しろき博士は夜の明方大坂より來り
き。されど重光は早とこしへに覺むべくも無う眠
りし後なれば、何れも夫人が上を心づけて歸りぬ。
夜は今あと無う明けたり。昨日の雨の名残に、沖は
猶霧いちめんに籠めて、武庫の山の頂のみほのか
に見ゆ。浪うちぎはには早や朝の潮に浴せむとす
る旅館々々の男女が蓑藁帽かす數へがたきまで
に成りぬ。海濱樓のおばしまに倚るは河原木ドク
トルなり。限なき人とてかばかりにあらじと、助教

授が、ふかき思に打たれし妹の君よりも、猶すぐれ
しかたち持つは此ドクトルなり。伯林の三とせの最
後の一年は、この人の面の上に拭ふこと難き曇り
を帯びさせぬれど、されど美しくしきは河原木ドク
トルなりき。伯林のかりすまひは、なにがし博士が
二階なりき。その家の娘テレザは姉なりき。ドクト
ルを思ひぬ。ドクトルはやうく十六の少女エリ
サベットを戀ひぬ。夕は食卓の前に、さまざまのを
かしくき物語つくり出して、求めむとせしは妹娘エ
リサベットの笑顔なりき。かくてわりなう思ひし
エリサベットは人に嫁き、初めて父博士の間に水
いろぎぬの衣きしを見し日より、よき人と思ひぬ
じ。テレザは水に赴きぬ。ドクトルの寫真いだきて。

歸りて後の三とせをかしづくすがたのぬしはそ
の人なり。戀ならじ、われは幽かなる闇に果なう思
ひをたどるなりと、ドクトルは觀じ居たりき。友の
勧めに此春より一家を京都へうつしぬ。一家とは
家庭の後ろ見する伯母をおきては、はらからのみ
なり。敢てめとらじ、われ此闇たどる心うせぬ限り
戀は得られじ、人と親まじと堅く思ひ居しドクト
ルは、この海邊にて園岡子爵の子をさなき重光と
相知りぬ。おのれを忘れてこのあひだドクトルは
闇追ふ心を忘れ居しなりき。ひと夜いねずて疲れ
し腦は、頭のなかに鬼ありて汝は復もとの闇に歸
らざるべからずと囁やくと覺ゆるなり。今ふとあ
げし瞳子に子爵夫人はうつりぬ。その柱に立て

るなり。わが方まもりて、松葉色の紋透矢の限なう
皺つきしをまとひたる亂れ髪の人、つかくと
寄りきぬ。

「君は重光を泣き給ふか、うれしき君かな。われ
今夫の無情を知りぬ、彼の人は彼の神の如きもの
を此浦にて灰となして歸らむと云ふなり。今にし
て知りぬ、ここへおきしは我につらき目見せむと
てなり。君こそ彼の子にはよき人なれ、泣きて賜は
るよ、君は。」

「美しくしき神の子を子とせし母は、さるはした
なきさまに泣き給ふべきものならず。薬まゐらせ
む、徐かに飲み給へ。」

「いとよきドクトルの君かな、わが夫は斯かる

こと云はず、わが夫は鬼なり。われを君が間に伴ひ給へ、そこに眠らしめ給へ。」

『ねむ氣おぼえ給ひてや、何も君が云ひ給ふまにすべし、そは子爵と議りて。』

夫人はひとり歩み入りぬ。そこにはかをるの在ればと、心やすうドクトルは目送するなり。戸のかけより出でしは園岡子爵、ドクトルの手を取りて、

『君はわが妻を救ひ給ふべきか、これ唯君が力なり、あはれみ給へ、われを、妻を。』

『心やすう居給へ、われ在る限り君が幸は安かるべし。』

いとうれしと子爵は思ひぬ。二日へて旅館のあるじは、小さき壺の美しくしき錦もてつつめるを子爵

に捧げぬ。病める夫人を情あるドクトルに委ねて子爵は京に歸りぬ。ドクトルが従前の間に臥せる夫人は、その時まで夫に一語をも發せざりき。

子爵去りて一週の後より夫人の病はうすらぎそめぬ。ひと月の後には、ドクトルに伴はれて海邊に出づるやうに成りぬ。ドクトルが肱かして歌ふ彼方の詩を解し得ては、笑むやうに成りし此頃の夫人よ、おもこそ瘦せぬれ、重光のありし時とても見ざりし美しくしき色の頬に泛ぶことさへあり。立波助教授は土曜ごとにかをるを訪ふことを怠らざりき。ある時かくさゝやきぬ。

「子によりて人生の意義の半を知りし子爵夫人は、今ドクトルに由りて完全き人とは成りぬら

山寨

(源九郎義經と伊勢三郎との事を歌へる)

(一)

遽かにもこの日は暮れて
くらがりの如法夜叉聞
むら杉の木立とどろと
かき亂し狂ふあらしや
面うつは雨かあられか

矢つがへて射るにも似たり
この山に魔障のありて
義經をためすとならば
其れもよし雨とあらしと
歇ますあれ百日八十宵

足柄を越えにし其の日
義經にひがしの國の
荒武者を三十萬騎
率ゐ立つ大將軍と
成らむこと許しまさずば
この峰をやはかは西へ
往なむやと誓ひし我ぞ

されば今こそをどりしつゝ、
火を燧りて焚きても過ぎむ

あきびとのおやち吉次は
鞍馬なる法師たばかり
我君を率て行くほどの
末の世の不敵人なり
年々に黄金買へばや
陸奥の旅も幾たび
踏みまどひ山路に暮れし
恐ろしの夜には慣れぬと
京なまり小唄をかしく
もろ手うつ大荒れの中

かゝるをり地を裂くばかり

一すぢのいなづまの影

「あ」と見れば又も一すぢ

すすまじき光さしけり

さいはひやひと目みつるは

おごそかに大きな門

さぐりより叩きたまへば

内よりはけはひ優しく

袖おほひ手燭さしのべ

うらわかきをとめ出できぬ

鹽釜に詣づる者ぞ

行き暮れて雨になやめり

ゆくりなく訪ふもえにしや
宿かせとのたまひたれば
額しろきをとめすがたの
もの羞ぢて口籠るこゑに
わが夫こそ國をゆすりて
人の知る心猛なれ
よき敵の今日もありてか
朝いでて未だ歸らず

宿ひと夜かしまつらむは
何ほどの事となけれど
さりとしも夫の知りなば
客人に悪しき目みせむ

かくいらへためらひぬるに
あさはかの事のたまふよ
あはれさは知る人ぞ知る
いささかのなさけおぼさば
足よわのこの旅の者
しばしだに寄れと云はずや

ことわりに女は打笑みて
いざ内へさらば客人
歸り來む主に知らさじと
灯は消して衾ひきませ
くだかけの一こゑ鳴かば
疾く起きて出で立ち給へ

人の世はともかくにも
安からずさはりはあるよ
わび給ふ秋のひと夜も
或時はおもひでにこそ

(三)

みやこにも稀有なるばかり
心ある女が會釋やと
うち興じ衣うちしぼり
内に入りあたりを見れば
さながらに國司が館か
いかめしく城づくりせり

なかなかに灯あかくかまげ
常のごと高き軒聲に
ひちまくら吉次とならべ
おほらかに眠りましけり

夜も更けて子も過ぎしほど
門あらく足ふみならし
鬼づらの老武者どもは
右ひだり四天王のさま
おのおのがとりし矛には
なまぐさき生血たれたり
こは如何に勝ち誇りたる
十八の面のくれなる

悠々と笑ひさいめき
山寨の主は歸りきぬ

わかき眉くろく秀でて
まなざしの怖きしたには
江戸、葛西、西の大名
ひと目みて百里のがれむ
つはものに手斧にぎらせ
まろうどの衾めぐりて
うるはしきおん顔ながめ
手を三たび拍てばやうく
折鳥帽子すこし揺れて
欠伸して起き給ふかな

あなゆゝし此年ごろを
東國の鄙に育てば
われ未だまろうどのごと
をかされぬ威形そなはり
膽ふとく天がした呑む
將軍の相こそ知らね
沈みては龍もしばらく
こもり沼にかくれぬる世ぞ
雲まちて此にも一人
名のりせむいざとぞ云へる

似かよへる汝が若さよ
おもしろし願ひは容れむ

我こそは源氏の嫡流
義朝が末子九郎義經
おもひ立つ志あり
奥州の秀衡たより
はるばると都を出でて
うき旅に年を重ねつ
はからずもこよひの宿に
縁ありて名のりはするぞ
あなやとて座をすべり伏し
さればこそ此僻目にも
人中の眞玉しら玉
氏高き君と見わきし

やつがれが父なる者は
伊勢にして源氏に仕へ
左馬頭討たれたまひし
その後を此にさすらひ
國びとの中に生みしが
かく申す伊勢三郎
甲斐もなきやつがれながら
年日頃いかでふたゝび
花さかむ源氏の御世に
天がした爲しまつらばと
つはものを密かに備へ
時まちて此に候へ

岩が鼻山の名きくも
をさな兒が泣きをとどむる
山賊の姿あさまし
かくしてぞ身はやつしける

年ごろの願かなひて
我君を今日見まつると
妻を呼べは青きからぎぬ
赤裳ひき御銚子とりて
奉るいはひの酒は
きこし召せおふけなれど
百萬の平家ありとも
みさぶらひ三郎こゝに

一人して楯は足れりと
雄々しくも誓ひ誓ひぬ

しろがねの轡はませし
君が馬おのれ口とり
奥州へ御供の門出
さらばとて勇めるうしろ
さばかりの雨雲はれて
くだかけはほがらに鳴きぬ
いはけなき女ごころや
涙ぐみ見おくる柱
將軍とわが夫の上に
下野の夜は明けにけり

船 路

(一)

隅田川丸が馬關を出帆するのは十二月三十一日、大晦日の午後四時。

冬の日の短いうへに、正午すぎから曇りだし、今にもこの乾風に氷雨でも降りさうな空は例日より早う暮れた、この四五日石州さかひの山から避寒に下りて来らしい。帯のやうな、灰色の濃い、霧は此港と門司と兩方の港に粘りついて、如何にも

凍けて離れない。霧のなか、ら最早兩方の港の火が海を隔て、天の河の中にした星の夜のやうに輝く。それに出る船、はいる船、とまる船、幾百の帆檣に紅白の火をつけて、大阪以西第一の繁華を誇る港は、今日の大晦日の故で一層の活氣を帯びて居る。

昨日夜ふけて大阪から入港した隅田川丸は、此港からの積荷も済まし乗客も載せ終つて錨を揚げ出した。

『川卯の御客です、川卯です。』

○に川の字を書いた提灯を振つて、一艘の端艇が遅馳せに急いで右舷に漕ぎ寄せた。

『早く、早く』と船梯子の口に立つ事務長の聲。『お氣をお付け下さい、お危険うムいます。お手廻は宜しうムいますから。』と川卯の若い者は提灯を左の手に、右の手で確乎船梯子の欄綱を掴んで、端艇の動搖を制して客を揚げた。

客と云ふは男女二人。

瑠璃組の二重廻の頭巾を眉深に被つた男の顔が、口に啣へた葉巻を一吸ひ吸つてぱつとした時、の黒い美事な髭の一部を見せたばかり。女も黒の吾妻被布に藤紫のお高祖頭巾、顔は見えす、男の左の手に絶つて俯視きがち。

『上等です。』と下から若い者が注意した。男は事務長の會釋に一寸頷いたまゝ、船丁の案内する艦

の上等室へ下りて行く。舷側の水仕口で大鍋を洗つて居る、白の汚れた小倉の夏服の上に焦茶の古びた外套を被つた炊夫が、

『ちよッ、野郎に手を取られ奉りの、能く出来てらあ、阿魔め。』と二人を見送つて呟いた時、船は波を研つて動いた。

告別のあはれを此の不骨者も知つて居るかの如き太いだみ聲の汽笛が續けざまに響く。これは他船との危険を警めて吹くので。狭い此の海峡を通りぬける間。

夕暮の急潮は墨よりも黒い。

わづか十二時間たつか経たぬにその國の一部の釜山に着くことの出来るとは云へ、朝鮮は外國、乘

客は誰人も是れが永く日本と訣れる旅のやうな、
二度と見られぬ故郷のやうな氣がして、今更甲板
に驅上つて、遠ざかる陸上を振り回つて、悄然として
一齊に名残が惜まれる。

彼方燦爛とした陸上の夜景は、希望と幸榮とに満
ちた光明の世界で、最早明日の春が明日を待たず
に來たやうであるが、乗客はその光明の國を逐は
れて、この薄暗い、地獄の淵のやうに渦巻く大洋の
上を、永久に歸れぬ淪落失意の島へ流されて行く
やうな心地も爲る。

明後日は黄海を左に見る長直路沖で、小雪に成つ
て舞はうと云ふ海風が、最早今から小躍りして船
を離れない。寒さは一しほ身に浸んで慄々させる。

『諸君、諸君、お聞き下さい。』

突然起つた若い甲走つた聲は、人々の甲板を下り
て各自の部屋に就かうとする思ひを制止めた。

と見ると、荒い久留米がすりの筒袖に、紺絞の兵兒
帯、白い小倉袴を短かく附けて、淺黄霜降の烏打帽
に護謨靴を穿いた書生姿、面長な、夜目にも色の白
い、何故か黒い色眼鏡を懸けて、年は十八九か、それ
とも實際は、二十を越したか、二歩三步後すざりし
て、艦の上等室の天井窓に居凭つて立つた。

乗客はその郷國と別れる少時の沈思から喚起さ
れて、まだ夢の全く醒めきらぬ心地で、何れも半無
意識に、聲のする方へ聲を圍むやうに詰め寄る。

『演説ぢや、演説ぢや。』と十三四の小僧船中で菓

子を賣る役の小僧が、頼まれて振れ廻るやうに呼はつて、事務室の方から驅け寄つて、是れも聴衆に加はる。

如何にも演説である。この奇怪な演士、船中の謀反人、社會黨、小刺客とも見るべき書生は、手摺に烏打帽を脱いで、帽の廂を右の手で抓んで打振り乍ら

『僕は胡亂な者では、いませせん、船長さんには僕の現籍が分つて居ります。大阪府知事が呉れた旅行券は、確かに僕が三箇年間韓國に旅行することを許して居る。

諸君、ふるい言葉ながら、袖と袖とを觸れ合ふも前生からの縁で有ると申します。況んや今日、諸君と僕とは、この美しくしい故郷を離れて、同船し

て、この寒い時節に、この荒い波の上に、目的の地を同うして旅だちを爲ますると云ふのは、能々深い御縁があるのでは有りますまいか。

それに今日は何日であるか。申すまでも無い十二月三十一日、日本中の人が收支の決算に目の廻る程の日で有ります。今日一日が越されぬ爲には、陸上の人が如何程の苦しみを嘗ますか。心にも無い争ひを爲る人も有らう、祖先からの家邸田畑を人手に渡す人も有らう、娘を賣るやうな悲しい人も有りませう、刑事上の罪人に成るやうな淺ましい人も有りませう。又この一夜を越せば明日は正月元日、めでたいめでたいと酌み交す屠蘇の酔ひには、家内も和らぎ、親類縁者

朋友も睦じさを増しまする。

嗚呼諸君、大晦日と元日、この二つの一年の太切な日を、温かな故郷にも暮さず、睦じい家族友人とも共にせず、お互に千里の海外へ舟を同じうして、寂寥しい斯様な旅行を爲ると云ふのは、如何なる理由が有る爲めでせうか。

國利民福、この四字は立派な言葉です。諸君の内には官吏として彼國に御出張なされる方も有らう、實業家として奮發して旅行せらるゝ方もムいませう、手段と職業とは違つて居ても、御目的は皆國利民福の外に出でません。であるから諸君は、今こゝに故郷の姿が段々と遠ざかるに係らず、故郷と別れる名残は惜まれるに係らず、

男子の涙を抑へて、勇ましく朝鮮海を横断なさ

れる譯と思ひます。』
言ひさして演士は振回つたが、船は海峡の大部分を通過して了つて、馬關の港は疾くに見えなく成つて居る。聴衆も一同振回つて見た。折と云ひ場所と云ひ、演士の云ふ所は高德の上人の法話のやう、一語一句が身に浸みる。感に打たれた聴衆は、再び演士を見守つたまゝ、無言である。

(三)

『然るに諸君、悲しむべき事には、諸君と船を同じうし行先を同じうして居ながら、目的志を同じう

して居ぬ者が三人、この船の中に乗つて居ります。演士は感情の激昂を抑へやうとして、俯視いて、左の袂から田舎びた白地の手拭を出して、頻に顔を拭うた。兩の頬は紅をさしたやうに熱上て居る。』船員が伺つて居るのか、大きな茶と白の斑の洋犬が、悠然來て、菓子賣の小僧と並んで演士の前に蹲まつた。

『諸君、その三人は人間……人間の皮を被つた……さやう、此處に居る此の犬と同じです、此船には此の犬を加へて四匹の畜生が乗つて居るのです。諸君お寒いにお氣の毒では有るが、何卒お聞きを願ひたい。』

その畜生の一人は僕、即ち斯様に申す私。』この

時下等室から階を上つて、半身を甲板に出した、洋服着の四十恰好、人夫の親方とも思はれる男が、『船の若い衆、おい、酒を呉れせえ、酒を。』と中腰に成つて、長州辯の胴間聲、最早船に乗るまでに稻荷町の何處かで、門出と年忘れとを兼ねて、十分と過ぐして來たらしい。

『お、寒い、酒をお呉れませ、船ぢやあ御嬢より徳利でございす、温といでなあ。』

船の中部の厨事室を向いて獨語したが、振向ざま足を階段から轉落らうとして、危く階の入口に手を掛けて支へた時、艦の人だかりが眼に附いた。

『何ですかいの、救世軍……船の中で耶蘇坊はあのお説教は源助や。』

渠は茫乎とした酔つばらひの眼を見開いて、夜目に此方を透したが、蹣跚と歩み寄つて、演士と並んで右の方へ腰を掛けやうとした。如何したか腰が轉つて尻餅を軽くついたが、その儘兩足を犬の前に投げ出して、

『御免なされ、へえ、耶蘇の御宗旨は耳にはいるかな』

手を組んだまゝ、ぐなりと頭をうなだれた。折から一人の船丁が小さな角燈を持つてきて、演士の左の窓の上に置いて、是も聴衆に加はる。角燈の火で酔つばらひの顔が斜に照らされて、膏の乗つた肥太の頬から額がてか、くと赤い。半眼に細う開いた眼は、實は最早眠つて居る。この男の鼻息と犬の

鼻息とが、演士と聴衆との間尺ほどの小徑に籠つて、それに角燈の光がさすのを、菓子賣の小僧は口を細うして眺める。

演説は餘程進んだ。

『そこで渠は僕の姉とは七年前からの許嫁である。渠が高等商業學校を卒業した曉には、僕の家に分家として、僕の父が三年前に言ひ遺して死んだ如く、五萬圓の遺産分配を受けて、和泉の國で紳士の尊敬を受け得る幸福者で有つた。

もともと紀州の瘦士族で、父が維新前に些少の義理が有るとは云へ、その末子を拾ひあげて、學問をさせたうへ、娘を呉れて、分家をさせる、巨萬の財産を譲る、さやうな事は能々渠を愛せねば

思はねば出来る事では無い。
渠が僕の父の恩義を感じたならば、誠に身を粉
にしても報せねば成るまいと思ふ。
渠は昨年高等商業學校を卒業しました。而して
如何したか、姉と結婚することも厭、分家するこ
とも厭、財産の分配も要らぬ。斯様な亡き養父の
恩を忘れ、許嫁の妻を捨て、本家の當主たる僕を
侮蔑にした暴言を吐きます。
愚かなるかな渠が恩ある父が遺産を受けざる
こと。無情なるかな渠が貞淑なる許嫁の妻を泣
かしむること。僕も姉も親戚も渠の友人も、皆渠
を諫めました。人非人なる渠は頑として聞入れ
ません。

諸君、渠が心を腐敗せしめて、如此き畜生道に墮
させた畜生が一人あります。

それは東京の素町人の娘、美人だの、高等女學校
を出たのと云つても、決して畜生で無いと云ふ
證據には成らぬ。渠が薄弱な心を溶解して、許嫁
の我が姉を棄てさせたは、全くその素町人の貧
乏娘の狐めが業です。
渠はその狐と結婚爲ました。墓の中の父と、姉と、
僕と三人は、未來永劫忘れられぬ侮辱を、渠等の
畜生から受けました。

演士は齒がみを爲て、雙眼に涙を浮べたまゝ、その
美しい顔に、怒氣と云ふよりは鬼氣と云ふべき
凄味を帯びて一同を見廻した。殊にその大きな黒

眼鏡が、人を咀ふ魔障の物の、闇黒を透して見る眼
球のやう。

『は、あ、御道理でげす。して奴さんは如何しまし
たえ。』

前に居た、山蠶紬の黄いろい綿入羽織を着て、大幅
の縮緬を重いほど腰に巻きつけた、職人風の、三十
恰好の男が、軽い關東辯で訊ねる。

『それが貴方はん、この船に乗つて居やはるのど
すがな。毒性な女えな、まあ、男はんも。』
傍から口を挿むのは、鶴の羽毛織の被布の上に、白
縮緬の首巻を門徒宗の御開山の繪像のやうに巻
いて、黒の中折帽の似合はぬ、是はこの度藝妓一人
舞妓二人京から仕入れて、下等室に潜ませ、行先は

仁川か京城か、それとも新開の鎮南浦か、歳暮の儲
けには遅れたれ、正月を當てゝの大陸遠征、頭の禿
げ振では長年朝鮮浦鹽斯徳を股に女衞商人の其
で有らう。

『乗込んで居ます、この船の上等室に。』と演士は
叫んだ。

『知つてらあ、馬關から女の手を引いて乗つた、う
む、彼客だ。』と犬の頭を撫で、小僧が。

『彼客か』皆も頷く。

演士は一層悲壯な語調に成つて、
『渠は今度仁川の副領事を拜命して赴任します
る。官吏として多數の上に立つと云ふには、心術
から品行から多數の上に立つだけの立派な者で

無くては成らん。…養父の遺命に背くその大恩を忘れて了ふ、さやうな者の口から如何して正義が説かれる。養父の遺産と許嫁の妻女とを狐の如き一婦人に見換へて耻と爲ぬ、さやうな薄志弱行の者の身で他人の善悪が裁判出来るか。…僕は日本の道義公德を維持する爲にも、渠が如き畜生の亡び失せることを祈ります。』

言ひさして身を戦かしたか少時はまた言葉が途絶える。仁川の副領事と聞いた時、女術の老爺は密とこの列から身を隠した。老爺の跡へ順送りに立つた、焦茶の一本綾の二重廻を着た金齒の紳士は、右の手を懐から出して、濃い、美しい形な髭をいぢりながら、

『お話を承れば我輩等も切齒に堪ん、十分に御胸中は察するばい、一體當今の官吏社會が不良ぢや。硬直高野孟矩君の如きが大聲呼疾して政府を罵るも所以が有るけ。腐敗、腐敗、あゝ官界の空氣を一掃するは政黨内閣に在るかな。』

山蠶紬の職人は後に附いて、

『先生、政黨内閣でば、かうと一番陸軍大將西郷隆盛てえな豪氣な方が政事を成さるんですかね。』

『まあそぎや、んなもんさ。』と紳士は苦笑して、更に演士に、

『貴公が、してまた畜生と自分を云ふは、何ちふ次第ばし有るかな。』

演士は嬉しさうにその秀でたる眉を昂げて此の

問に答へた。

『僕は野蠻時代の如く、腕力を以て渠等を殺さうとは爲ません。言論を以て公衆の同情に訴へ、公衆即ち諸君の公平な裁判を求めて渠等の滅亡を速やかに爲ます。僕は渠等畜生の行く處に付き纏うて、一夜も渠等に安眠を與へぬ事を一生の目的と爲ます。京都の高等學校を二年で退いて、斯様な諸君と異つた目的の爲に此の船に乗合はすのは、僕もまた畜生の心に墮ちたのでムいます。』

諸君、僕の敵は此の下に居る。』と覺えず拳を堅めて凭り掛つた上等室の天井窓を打つた。窓硝子は薄氷を割つたやうに碎けて室内に墮ちた。



『何を爲るッ。』
室内からけた、ま、しう叱つた聲は、皆が演士の高
湖に達した激語の爲に感轉た逼つて、『畜生ッ。』
と同音に叫んで拍手した響音に紛れて聞え無か
つた。

(三)

『はッくしよい、お、寒い、ひどく揺れくさる。』
人夫の親方と思はれた長州辯の酔つぱらひが目
を醒ました時は、甲板の人だかりは疾くに散じた
後で、船は正しく玄海に掛つて居る。
風は荒し、浪は高し、加之に咫尺を辨せぬ如法間。

の中を怪物の如く横ざる船には寂として人聲が
無い。たゞ機關のひびき、風のさけび、浪の崩れかゝ
る音。

『すツかり冷えやがツた、どれ一つ湯婆の爛を爲
るかの。あゝうんとこしよ。』

長州辯は立上つたが、揺れ上り揺れ下る甲板のう
へを、踏みしめ、踏みしめ、厨事室の方へ歩いて行く。
が、ちやりと音をさせたのは、背廣の隠袋の銀貨を
抓んだので有らう。厨事室の戸が開いて少時して
閉つたと思ふと、また蹣跚と上等室の天井窓の側
に歩み寄つた。

『嘔吐臭い中へ歸るのも邪魔けた。』

闇中に菊正宗の四合瓶三本を卸して、一本を取あ

へず瓶の口から煽る。つと窓の側に腰を掛けて、支
へに左の手を附くと、一段高う成つて生暖かい人
の膝。膝は動いてすツと左へ退く。

『おや、先刻の先生、まだ其處にお在ましたか。是は
失禮様。』

膝の主人は手を頭上に組んで、顔を襟に埋めたま
ゝ、頷いたが、相手には少しも見えぬ。

『先生お寝つては良けん。一つ元氣をお付けませ、
猪口が有りません、それ此方の口の附かんのを口
からぐツと。』

書生の頬べたへ瓶の口を斜に押附けたので、酒は
溢れて肩から胸へ、膝へ。

『これは失敬だ、僕は酒は飲みません。』と憤然と

する。瓶の手を引いて、

『は、は、あ、お酌人が悪るごいすか。私が頂きます、勿體ない。』と二息ほど飲んで、

『先生、世のなかあ妙でございすせ、女房が亡く成りましちや酒ですわな。』

次第に湯婆の熱が廻り出す。演士の書生は激昂した頭脳が凜烈たる海風に吹かれて漸と鎮静したと同時に、一種の幽鬱な黙思に沈んだ三時間後の今、だしぬけに此の不規律な酒くらひの友を傍に得て、煩さいとも不愉快とも汚らはしいとも、云ひやうの無い感に撲たれる。さりとして此處を立去る心には成らない、この窓の下には畜生夫婦が小さく成つて居る、夜どほし此處に見張をして、畜生ど

もに一秒間の安眠をも與へぬことの楽しさは、何にまた易へられやう。

じつと又襟に顔を埋めて何事も聞かぬ振。長州辯は益々呂律が廻らなく成るが、氣燄は却つて浪と共に高まる。

『酒を飲みなさらんちふは不憫な御子ぢや。ではまだ女の子のなさけも分るまい。は、は、あ……：うむ何んだ、先刻はえらう、先生の辯が廻りました。みんなが手まで拍つて囃した……：辯が何んだ、演説が何んだ。私が村の徳山の吉田は代言で、辯は國會議員に成れるほど巧いと云ふけれど、嫁に來者が無いとこ見ると、辯や法律で良い嫁は貰へん。……：私なんか十七で、母かたの、家調(田租)の千

僕も取れる富限に貫はれたけど、何んの男が家調の餌に掛つて、好きもせん女房の釣釣に馬鹿な目を見ることか、へえ先生、かわいゝのが一人出来ましてな、先は賤しい石屋の末娘、私は是でも毛利の御支藩の士族、人の口が煩さいから連れて退きましたよ。彼女が一つ下で十六、止めましよ、道行は長うございすて……で彼女が従弟の縁を便つて、石州の銀山に落着いて、到頭銀山男の世渡りで此の通り、先生、憚りながら鑛山男と飄零れても戀女房は有りますからな……辯が廻る、演説……そりやあ口先でさ。口先の巧いのは私の兄も巧うございす。兩親の葬式の入用は誰人が爲た。皆この勘當しられた弟にさせといて、二言目には貴様は兄

を構はん。兄者人、兄がそれほど實が有るかい。去年彼女が死んだ時、私が泣いた涙の萬の一しづくも兄が落したかい。はゝあ、兄ぢや兄ぢやも眞平でございす……先生は御苦勞様な、演説を船まで來で成さるが、私は先生大學は卒業しませんけどね、一人の女房の可愛いゝこつと、酒のうまいこつとは知つてますでなあ……ぢやが、あゝ、その可愛いゝ女房は最早居よらん。」

『最早居よらん。』と急に滅入つた調子に成つて、瓶を膝に抱いて涙ぐんだが、直ぐ氣を取り直して、

『酒ぢや、酒ぢや。』

ふた口三口煽ると、訃氣は遽かに激した。

『さあ、先生も一杯、是非にも飲ませるッ。』

左の手を頸に掛けて、引締めて、瓶の口を口元に當てがつたが、

『何んだ厭だと……』

拒むで拒解かうとする利腕を引いて、ねぢ倒して、片膝を脊に載つかけて、手にした大瓶を逆に取りなほして打下すや、力は鍛へた鑛山男。

『うゝむ……』と一呻吟して轉倒る音。

『はゝ、はゝ、あ。』と笑つたが、これもどさり倒れ重つたらしい音。さて後は幽鬼海を行くの間か、一しほ増る閑寂。

船は對馬沖を通るらしい。暗い空に、ちらりく、音のせぬ魔の撲つ礫のやう、雪が降りだした。

明くれば元日の午前六時、隅田川丸は月尾島を左舷に見て釜山の港に碇泊した。夜半すぎから降り出した雪は、今日の祝ひの爲に化粧した如く美事に船の上を飾つたので、乗客船員舉つて新しい年の吉兆と賀したが、艦の甲板に雪を被つた寢姿の綺麗な酔興の二乗客を、起せども覺せども甲斐なき、大阪府平民學生諸戸清一十九歳、山口縣士族韓國般山金鑛鑛夫頭末永政矩四十二歳の死體と定つた時、船中は更に大騒ぎと成つた。

釜山の日本領事館から警部、醫員、巡查が臨檢に來た。醫員の診斷では、學生は打撲傷のために腦震盪を起して事斷れたが、鑛夫頭は大酔の餘りに眠つて寒氣の爲に窒息したものとある。

鐵夫頭の變死は酒の罰と言ひおとして誰も左程に惜ま無かつたが、昨夜の演説を繰返して、船中一同口々に學生の無慘な死にかたを哀んだ。そして當港の領事館員と共に、二つの白木の柩を載せた端艇に乘移つて、男は外套の頭巾に、女は紫絹の洋傘に、互に面を羞ちて、愁然と護送して上陸したまふ、再び此の船に歸つて來なかつた上等客諸戸富樹夫婦二人に就いては、誰一人おもひやりの有る者が無かつた。

——鐵幹作——

舊人

詩は成りぬ。——曾てはこもまた通り魔が執ありや、羽搏しづかに降り寄り、咀ひの囁き、あなあさまし、口接けてわれ酔はしむと悲びにしか。——詩は成りぬ。

詩は成りぬ。——曾てはこもまたわが花環、美しくしの地上の王后、稀に君見て、桂は黄金に、百合はしろ銀にぞ造りあやぎぬかづけ密と捧げしか。——詩は成りぬ。

詩は成りぬ。——曾てはこもまたわが管絃、

君は瑠璃鳥、わが笛に、しばしなづさひ、
君は百合花、わが琴に、しばしそよぎし。
あらずよ、こはまた今も君に奏べて。——詩は成りぬ。

詩は成りぬ。——歌ふを許せ、ひとつ星、君は明星、
あゝ遠く西のゆふべに移り輝く。
われにそむくも、さもあれ、人に行くも
君は美しくし、歌はざらめや、——詩は成りぬ。

詩は成りぬ。——（そこに世は満つ、失望の
或は涕涙、或は憤怒、われ關せず。）
あゝ君の、よし愛せずも、我とこそ
君愛するに心は飢ゑず。——詩は成りぬ。

詩は成りぬ。もとより泣かず、憤らず、
（こもはた嬉し、美妙の慈相、君が化導か。）
君をしのぶに心やはらぎ、春の水の
湧きて流るるわが歡喜。——詩は成りぬ。

詩は成りぬ。——あゝまた憚りの關守、
許せと賂そへ、誰にか忍び傳てしめむ。
鄙調あやにく藝苑の選に入らねば、
讀者は一人、たゞ一人、われとこそ。——詩は成りぬ。

詩は成りぬ。——こは若し假に玉と響くも、
とこしへ齋きつかふる胸の戸帳、
金碧古りて猶はた燦たる君が繪像に、

題しては唯笑む孤獨の畫讃よ。——詩は成りぬ。

——鐵幹作——

やつれぎぬ

(明治三十七年九月父君のかくれ給へる時)

御葬送りにやつれぎぬ着る中の子をかへり見まささでよき道おはせ

父ぞ來ます御列むかふる秋の寺つめ
たき廊の敷瓦がな

おもひ子は名しらぬ罪を兄に負ひ御
棺遠き中の間に眠る

母を見ればありし目に似ぬ御髪つき
百二十里を來し父の家

棺にして今前を過ぎ堂に入ると鳴る
鏝鉞の音さへ聞きぬ

父なうて島田に似たる忌部いみのいまだふさ
ふか末の姉妹おとと

二十四に成れば男とわが言ひし弟おととの

片頬よく父に似る

あなかしこ兄をうらみの涙さへまじ
ると知らばまどひまさむ道

御棺みひつぎにあまり泣く子は供許ともゆるらず萩さ
く徑みちを母と行く寺

兒こを具して召めに具されしさくら月足
ると笑ませし御眼みめも開かぬ

さらば父地ちの百里は隔てありぬ我家
の笑みを天あめに見たまへ

七日がたり

この會おもひ立ち給ひしあるじ達彌たちやの君の浮か
ぬ色なるを、十哩に足らぬ汽車のつかれば、白き帛きぬ
かけし圓き卓いすの上の、美しくしき瓶かみの酒、ちひさき雌め
胡こに三つ重ねむ時は、常の君と成り給ふべしと、妹
の少女たちは氣にとめぬさまなり。花代はなよは優れて
黒き瞳もてる少女なれど、くせなき髪、豊かなる頬
は、姉の鈴江のものぞと自から羞づるやうなるは、
この休みに種雄たねおを得てしよりなり。されど極めて

愛嬌づきたる聲音は、若き従兄の學士の睡をして、その都より伴ひこし町田學士を覗ふやう爲しめぬ。『停車場へ』と姉は稍さげすむ如く、わが負ひし月曜日を語らむとする花代を見つめつ。鈴江を詰る如き目つきして、種雄はやがて他方を向きぬ。花代は『そは大沼伯爵夫人の都へ歸り給ふを偶然おもひ出でて、他ながらの挨拶もと、水車小屋のかたへ行きて睡を返せしと知り給へ。』『リムも共に』と小さき光代は聲はさみぬ。頷かれて、さも勝ち得しやうに笑むを、達彌はいとしと見るさまなり。『上り列車は早客を載せて後なりき。されば伯母君の喜び給ふ彼の夫人の都挨拶は得持ち歸らざりき。』光代は町田學士に酒つぎやりぬ。『出でむとする

時、かなたの待合室に、わが曾て見しこと無きまで美しくしき人を見つ。『達彌のほかの十の睡は一つに寄りぬ。』『疲れたるさまにて、彼方むきたる人の腕に憑りかかり居たり。』鈴江『夫人にてや。』『あらざるべし。』そが中に物言ふらしき毎に、極めて禮あつきさまなりき。ホテルまで忍び給へ、一里には足らじと男の云ひし時、ホテルと彼人の思はずなるべき、高き聲ききつ。やがて紫の傘ひろげられて、長谷の方へは迂路なるべき細道を海邊に行きしまで、われは立ちつくしぬ、あまりの美しくしさに撲たれて。『中姉上、髪のかたち、衣の色、おぼえ給ふ限りゆるし給へ。』『さきより何事も云はざりし浪江は、膝すゝめむとて、町田學士の團扇に袖かけしを、は

したなしと従兄の友は思ふべしと面赧めぬ。種雄のかた向きて花代、島田と思ひ給ふか。『あらじ、君のやうにて。』わが如き癖髪ならざりしかど。『早く語り続け給へ。』さながら高きところより女神の物宣り給ふ如しと、町田學士は鈴江の聲を思ひぬ。『衣はさまで眩き物とは思ひ給はじ、紺青色の透矢、井の字がすり。』井の字がすり。』と達彌は獨りごつやうに妹を見つめつ。『姉君の召す其よりも細かかりき。みどり色の帯は大和錦にや。淡紅色の帯あげ、下がさねは臘脂の絹なりと見ぬ。』達彌はいよゝ浮かぬ色に窓のきはに立ちぬ。光代、年は中姉上ばかりの君にか。』われと姉上との間ばかりと見しかど、汽車のつかれ愈えての後のその人を見

ねば。』町田學士はうなづきて『さてその男は。』男とや、男は見ざりき。帽ふかきのみならず、彼方むく用意の餘りかしこきも憎く、われは唯その美くしき人の虜となりぬ。今、今は早火曜日かたる人の聴衆となるを許し給へ。』と右にすわれる浪江に白酒つぎもらふ。さきの女王のほりかなる笑みを、種雄美しくしと見入りたり、その次は光代との、前の日曜の午後のさだめを、何れも忘じぬしやうに、睡まろうしぬ。種雄に拍手されて、十三の少女、伯父を真似せし咳ばらひ一つ。伴なひしはリムなりし。』言はでも。』と花代の笑ふを、種雄は睨む真似す。鈴江、稻村が崎の鞆へか。』大姉上は能く知りぬますよ、リムは我れより先き松原の芝にす

わりぬ。われは歌ひぬ、中姉上に教へられし歌を。』
花代は姉をしのび見ぬ。さて種雄のかたに向きぬ。
『小姉上、かの岡の下に離座敷ある宿は何と云ひ
し、知り居たまふや。』『この春できし稻村ホテル』
と小聲に教へられつ。『いつぞや我れは彼處へ行
きぬ、兄君につれられて。京都大學の教授の君を訪
ひになり。』もどかしと口笛ふくは學士なり。『火曜
日を語り給へ。』と鈴江のいらだちたる聲に、光代
は口疾く、『かの歌き、給へと云ふ聲、その垣よ
り洩れきぬ。われは羞かしければ歌ひ歇めつ。ブラ
ンコに乗りぬ。高くあがりし時、リムにわが誇るべ
くリムを見むとせし目は、美しくしき人を見ぬ。椽に
腰うちかけし一人の人は、美しくしき人の鬢の毛な

でやり居たり。その鬢ある人、誰なりしか見し人の
やうなれど、よく覺えず。二人とも、いつぞや兄上、兄
上の三橋の湯にめして後借り給ひしやうなる浴
衣かたなりき。われは其よりひと時ばかりリムを抱き
て轉寢きつ、日かげの松が根に、そは毎日の例なれ
ば。』浪江は姉らしげに微笑みぬ。光代は落せし團
扇を無心に拾ひて、『われは兄上の話しに聞きし
女神の歌ひ給ひし如き歌聲に目ざめぬ。かの座敷
よりなり。中姉上、中姉上より吾がならひし歌、わが
ひと時まへ、歌ひゐし其なりき、歌は。』火曜日のち
さき少女は、そのはればれしき瞳に一座を見わた
して、次は町田學士ぞと云ふ。學士『われは最はづか
し、されど許し給はじ。』鈴江』もとよりなり、花代、光

代の話をだに聴き居しを。』こはこの大姉上の性質なれど、種雄は花代を數へられしに、われら二人を辱しめられしやうの面持して、下を向きぬ。學士『されど餘りに趣なし。われは彼の若き博士の、過ぎし夜あわてゝ秘めし文がらのこと思ひ出でしかば、強ひても其に趣味もちて訪ひぬ。』種雄『時岡を』『さなり、運めでたく捉へらるゝ我等が爲には博言學の講師。』と笑ひつ。『されど博士は在らざりき、不幸なる水曜日なり。』種雄も高く笑ひつ。『されどまた甚だ幸なる水曜日なりき。種雄』甚だ幸なる、歸るさに圓覺寺へ廻りて禪師や在せし。』あらず、在せしは夫人なり。われは彼の高慢なる博士の夫人と語らざるを得ざりき。』領さしを、大人ぶりな

りと學士の思はずやと、浪江は桔梗の畫その色にて書きし絹扇の小さきを、ひらき、すばめなどして紛らさむと力む。白き絹とり出で、襟ども拭く鈴江ぞ心地よげなる。達彌は心地少しや直りし、はた可笑しかるべき學士の話に憂さやらむとや、此方に歩みて花代の右の椅子に倚りぬ。種雄は林檎むかむとする光代に、われ代りて小刀とりつゝ、『博士は何處へ行きし、彼の夫人と離れて。』『大磯なる不破教授の病を見舞ひに行きしは一昨日と聞きぬ。』『殊勝』と種雄はむきはじめつ。巧みなる手つきに、さくさくと音して、繰られたるなめし皮の平緒と見ゆる皮は、中膝に長くも垂れぬ。椅子のしたよりじやれつきしはリムなり、何時の程にか聴衆に

は加はりけむ。暑くろしと鈴江は厨夫よびて引き出させつ。『殊勝なりしはわれなり。彼の夫人の前に、二時間ばかり。終に堪へがたく、われ昨日より腦のわろきよしを云ひぬ。早川家にありては思ひわづらひ給ふ事おほかるべし、君わかきいませば、又あまた若くいませばと云ひし時の、彼女が面ぞまこと憎かりし。』鈴江の顔には、なかなかに矜らしげなる笑みの溢るゝなり。『さて捨ておき給はゞ悪ろし、薬まゐらせむと立ちて、儼おほく載せし柵の前に椅子うつして、茂春の量にて宜しかるべしと首かたぶくる薬師劑に、われは面そむけぬ、無禮げなる笑ひを見せじとて。』『その薬のみ給ひてや』と氣づかはしげなる小さき姉に『學士はもとより

健やかなる君。』と、光代は説明の勞を取りぬ、『君の座禪力も我慢しがたかりしか』と種雄は笑みて林檎を勧めぬ。花代は『おん幸うすかりし水曜日を弔しまゐらせむ。』と葡萄酒の饌とるに、學士は杯ひきて、『藥劑師の君、今日はやつがれ重體なり、量おほくして例の合薬をこそ賜らめ。』一座は笑ひくづれぬ。達彌も思はず高く笑ひて、厨のかたにウキスキ―を喚びぬ。浪江『われは木曜日の夕に時岡博士を見たりき。』『待ちたまへ。』と學士は種雄を見かへり、『彼の藥劑師の誕生日に招かれし日の朝、博士は歸りこしと聞きしにあらずや。』種雄は林檎ふくみたるまゝ『如何やうにても可し。』浪江『彼の水車小屋の後ろにてなりき。われは小屋の

片眼しひたる少女と語らむとて行きしなり。』は
したなしと思ふ心地に、鈴江は眉ひそめぬ。『少女
は使にゆきしなるべし、人なき小屋の火かげに吾
は小猫と遊びゐたり。しばらくして水の音する中
に、人のさゝめく如き聲を聞きつ。』詩の神を恭うやまひ
て、神秘を信ずる子なればと、花代はその清らなる
額髪を見つめぬ。『唯そこと思ひ給はずや、こは女
の聲なり。男、しかり、月も海のさまも唯かゝる夜な
りき、われは君のものとなりにしかな。水は一しき
りはげしき音しぬ、風の稻葉こえて添ひしなり。又
きこえしは男の聲、東への旅を更へて西へあくが
れよりし春を、君はなど物足らず恨めしげに爲た
まひしや。女、さはのたまふな、一月にとちぎり給ひ

し後の三月、あらず七月の長かりしを思ひ給へ。水
車のひゞき高くなりて、このたびは久しく止まず。』
學士まがその夜のおん家いへ菴どうは長きおん作なりしなる
べし。『鈴江はおもしろからぬ面持なり。』女の聲に
てこの度はかすかに如何にもして外よそながらにて
も見たし、わが命と見る手篋の文のなかなる丁ちやう子、
なでしこ、生ひし、生ひたる庭なりとも、君せめて許
し給はずや。男、そのむつかしき母の怪しみ惹きて、
われらが戀の危くなるともとや。餘りに大人おとなげな
し、幼なき君なり、泣き給ふか、愈々大人おとなげなし。女、わ
れはげに幼なし、されど一夜が中に白髪しろかもよほす
も少女なり。幼なき者の言葉は聴き給ふべきもの
ぞ、いかで我れを他の子と偽り給へ、さて明日の母

君のうたげの庭に延き給へ。男、心しづめ給へ、しかくさわがしく取みだすは、さるからだの人の常なれど。女、われ強ひて紛れ入らば何としたまふ。女の聲は美しくしけれど、甲走りてひと際高かりき。』光代『小姉上、そは男や負けたる』『否、その後の聲は聞かざりき。この度は水の音のさはりならず、その聲の次第に遠く歩みゆきしと思しかりき。われは小屋の少女のあまりに遅ければ、猫にいとま告げて其處いでぬ。知りおはすや其處の土橋。』さきより我顔のみまもらるゝが羞かしかりし學士に、かく云ひし少女ぞかしこき。『よく知れり、光代の君に伴はれて。』浪江はうなづきつ、『かの橋わたらむとして、向岸の松かげに我れは時岡博士を見ぬ。涼

みに出で給ひしなるべし、浴衣を着けて、團扇とりて、その縁ひろき白の帽は誰が目にも博士と著かるべし。今一人かなたの低き田の畔に下りかがみて、螢とらふる人のありしと覺えたり。『疲れ給ひしなるべし』と花代はねぎらひぬ。額の汗ぬぐはむきぬ、袂に求めて得ぬさま見て、町田學士は我手なるを禮して浪江の膝におきつと見るより、かなたの鈴江の投げこせしかた疾かりき。厨夫の運びしアイス、クリームは、洩れなく人々の前にゆきわたりぬ。匙の音のやみし時、種雄『金曜日とある招待状は、博士の門弟、否親友なる町田學士の手を経て授かりつ。』學士は『馬鹿な』とひとりごちぬ。『その親友の君におくれて、かの玄關に立ちしは正午と五

分前なりき。』『こまかし。』と學士は手拍たむばかりなり。『否、われは彼の家の内を語るまじ。大磯ばかりの汽車の疲れ云はせて賓客の前に出でぬ主人や、彼の妻が我等を少年の如く思へる挨拶ぶりや、八幡宮の祠官の銀行設立談や、それら語るを好まざれば。されば彼の門を入るまでを語り侍らむ。』『それは今の流行雑誌を評すると同じ手段なり、妙、いでやその表紙畫と口畫とを聞かむ。』學士はまた斯く挿みぬ。『聞きよく語り給へ。』と鈴江の云ふを、種雄は聞かぬさまなり。『師範學校の横手、博士の別荘の前なる木槿垣の横にて、我は女に呼びとめられぬ。口つぐみゐし達彌は『女に逢ふえにし多き週間かな。』とつぶやくやうに云ふを、花代『美しくし

き君になるべし。』鈴江『あらじ、彼のあたりは物乞ふやかから多きに。』種雄は苦笑して『まこと美しくしき人なり、衣は覺えず、夜會に百合の白きかざして。』花代『もとより知りておはしけるなるべし。』『否、君の知らぬ人なれば我れの知らぬ人なり。博士の宴におもむき給ふ君かと、つつましげに云ふ。』『妙、いよいよ妙。』と學士は椅子と共に後すぎりして笑めり。『御身もかと問ふに、さならねどと愈々伏目に成る人は西の國なまり。おもてだちてならで御庭へ入りたき者に侍るがと云ふ。さらば夫人の知るべにゐますやと我れは問ひつ。否、老夫人に仕ふる人に聊かゆかりある者にて。老夫人、われは思はず打笑ひぬ。老夫人とや、いしくも云ひ給ひし、二十

五にても彼の夫人こそ老夫人の名もため。かく云ふに、その人、二十五の夫人といふかしげなり。われ、然り、博士の夫人なり。その人かさねて、時岡博士の夫人とや。われ、然り、二十五の時岡博士夫人。君はまだ逢ひ給ひしこと無かるべし、博士とて三十二の壯年なり。ともかくも來給へ、ともなひまゐらせむ。かく云ふに、遽かに涙ぐみて、われは驚きぬ、無禮げの罪は許し給へ、わが訪問は又の日に爲すべしと。まことその女は斯くて愴惶しく消えしなり。『光代、氣のふれし人なるべし。』鈴江「さる狂氣の人と語り給ひしとや。」注ぎ給はれと花代に乞ひし酒のみほして、『わが對手なりし山川子爵の妹の桃色の服の爲めに疲れし目醫さむとて唯ひとり庭

に出でし時、思はずも木立のなかに前の女を認めつ。』學士は手を組みて『謹聽』と叫びぬ。『否、諸君は失望に終れり。認めしは確かならず、その美しくしき人のまぼろし、わが身に添ひゐしなるやも知り難し。花代は目に少し光り持ちて『今もか』と云ふ。』然り、今はそのまぼろし、君と一つに成りて。』金曜日の君のたくみなる詞かなと、浪江は口のうちに獨りごちぬ。鈴江は妬たかるべし。鈴江「われは海邊のおもむきあるを選びたり。』はかばかしく答する人もなきに、間のわろき面持して續けぬ。』されど月はもとより、星とても無き夜なりき。』光代「さらば小姉上の『磯の暗夜』のやうにか。』浪江はひそかに町田學士を見ぬ。種雄「いかに彼の詩を歌ひ給はずや。さ

らば大姉上が叙景の詞たすけ給ふこと多かるべし。』學士も『われもまだ知らぬは其の御作なり、今日まで。』と云ひて、伏目になれる作者の耳もとに、『きかせ給へ、いざ。』作者『ゆるし給へ、以前の作なれば。』あまたに詞はさまれし土曜日の女神は、いと不興になりて、『われは早語るまじ、この席に要なき身なり。浪江女史が詩には、そこに髪ふり亂したる若き女の、岩に額もたしたるも見ゆるなるべし。われは要なき身なり。』と簾障子荒く立て、此室出でしと思ふ間もなく、己が居室にて下婢よぶ聲けた、ましく聞えぬ。光代は我れより出でしこと、小さく成りて、姉達の面を覗ひつ。達彌は『渠の癖なれば。』と微笑みしが、學士は目を圓くして黙し

ぬ。種代と花代とは相顧みて苦笑したり。更に伏目に成りし作者の姫は泣くなるべし。しばし口開く人も無きに、達彌は浮かぬ顔の、一しは重き唇に、『今はわれの順なり。』蘇生せる心地に、光代は兄が好む蕉實を割きて、硝子の皿にすゝめぬ。『われは今朝逗子の海岸に悲惨なるものを見き。かくて我れは其を諸君の前に語らざるべからざるか。』云ひさして、云ひ知らぬ不快の色は面に充ちたり。同情の熱もちし種雄の瞳みつめて、『君は我が亡き姉の戀、その生涯、最後をも知り給へり。されど、その時はわれ猶をさなかりき。そこにて灰となして歸り給ひし父上母上の御面に、無限の悲しき色を認めまゐらせしのみ。』種雄は堪へがたきさまにて、達

彌が肩に手を掛け、『ともに在りしは我れなりき。その憎き貴族の子殺しに往かむと二人していきまきしも。』一座は水を打ちしばかりに静かなり。五町が程なる七里が濱の夕の浪は、人々の心臓の鼓動と共に、おなじ律格もちて手に取る如く響けり。達彌『われはその海岸に、かなしき姉を、再びまのあたり見る心地したり。井の字がすりの衣きし美しくしき人なり。その亡きがらも身ごもりて四箇月ばかりと多くは聞かね、漁夫どもの言葉ぞあさましかりし。』光代も泣きぬ、花代も泣きぬ。學士は物も云はず、彼御寺に行きては爲る如く、椅子の上にくみみて、手を膝に目閉ぢたり。しばらくして、其室洩れしは、種雄と浪江が『磯の暗夜』を、低き調へに歌

ふ聲なり。

—晶子作—

橘 媛

—

龍神りゅうじんうろくづ海のつかひ女
肩さし手さし供奉くわんぷしまつるは
菅すがだたみ八つ皮かわだたみ八つ
數へおよばぬ帛きぬうはだたみ
三重の御輿みこしに花とこぼれて

赤の御袴ましら大御衣
おん正身のみじろぐたびに
小波わきて飾る黒髪

潮の音こそ四方には通へ
前追ふ魚が頭頭の
瑠璃の燭を吹く風も有らねば
水晶に描く是れや蒔繪か
大わだつみの底の御啓
時に金色上より曳きて
清しきひゃき最も玲々
星の七つぞ深く落ちくる

『美はしきもの悉ねたむ
いまし龍神おそれ思はず
やまど美童の大皇子奪ると
相模の海や走水の海
巨浪ゆすりて詭計りけりな
犠牲に汝が獲し弟橘は
光環かざす天の幸姫
清らの戀のいきみすだまよ
星の御座へいざ疾く具せむ』

天の使に御手とられまし
いま上げませるおん客顔や
『相模の小野に燃ゆる凶火の

火中に立ちて問ひし君はも
とぞ御涙この界に一つ
熱く落ちぬと落ちぬと見しは
あなや刺櫛珠の刺櫛
櫛に尾を曳き星は昇りて

二

天ざかる鄙の上總に
藻をかづき勇魚とる男は
天がした今さわげるも
よそに聴く安き伏屋よ
めさむれば海は和ざたり

はしぎやし美しくし妻の
昨夜磯に得たる刺櫛
床に敷き寝ねてし夢よ
上臈や星や龍神
めづらかに尊かりきな

あな恐れ此櫛こそは
昨の朝七日七夜を
御方の御裳の端だに
得ばやとて相模七浦
上總潟長柄の邊にも

寄らずやと尋ねわびたる

纏^{まき}向^{むか}の日^ひ代^{しろ}の宮^{みや}の
御^み舍^と人^りが詞^{ことば}の御^み櫛^し
さらば妻^{つま}帆^ほ岡^{おか}の方^{かた}に
御^み軍^{いくさ}の跡^{あと}を追^おはまし

— 晶子 作 —

金蓮花

おぞのものみづから病^{やま}ますおちいら
ず知^しりたりげにも人^{ひと}を罵^{のの}る

あめつちにたゞ二人^{ふたり}なる戀^{こひ}もせむひ

168

がみて怖^{おそ}ぢて人に墮^おちめや

169

はらかならの嫉^{あや}みの神^{かみ}もさうぞきて戀^{こひ}
の春^{はる}笛^{ふえ}とりて來^きましぬ

なになれば名^ななき野^の花^{はな}のうらがれも
わがはらかならの傷^{きず}みに似^にたる

或^{ある}はふとおもかげ追^おひてはて知^しらす
或^{ある}はわびつゝ土^{つち}にぞ歸^{かへ}る

おそろしき老^{おきな}女^をの巫^{まじ}女^をが呪^{のろ}の口^{くち}もわ
が口^{くち}ふれて笑^{わら}まむとし思^{おも}ふ

さすらひは命いのちにすくふ火くひ鳥もぬ
けぬ枯かれぬうらわかき身は

すたれてはおもかげ恥づるふる壁かべ書あき
おもふに足りぬ我のあすの日

あめつちに身をひくうしてぬか伏せ
て在りは在り得めさびしきものを

(君をしもそこにうかひ稀に見る戀
の窓なる美しくしの夢)

亞弗利加の大野と我のかたくなとこ

の古きもの能く美しくしき

むらさきの長きふさ緒にくるひては
鷹がこぼし、紅梅の花

麥の香や初雷はつらいわたる青潮あなほや君と耶麻やま
土との眞夏まなげに別る(同門久保猪之吉の獨逸留學送別會の席上)

まくらべに足に紅百合ましろ百合兒
が眞裸まはだかの涼し夏床なつど

青潮や出でし眞玉やぬけてこし我兒
といます小さきおん神

輝やかにわが行くかたも戀ふる子の
在るかたも指せ黄金日向葵

寂寥はわが敗れこしふるさとかあな
憂と云ひてはた慕かしむ

反響して真洞に走る山姫の衣すれと
聴く木下そよかせ

西山に俳句する翁米はなし白梅そへ
て乾鮭まゐる(人々と字を結びての即興。魚の名)

山毛櫨に烏瓜なる下二尺青空透きて

富士のぞむ宿(青)

しろがねの緒よりか君が歌よりか今
あめつちに光いわたる(光)

戀しらぬ神かな胸に手ふれては炎の
海の音と云ひにし(海)

底しらぬ真洞に根ざす黒雲の渦巻く
なかに我眼は閉ぢぬ(雲)

何なれば草のひと葉を笛に吹き獨り
愁に泌みて泣かるる(笛)

牛飼がわかき愁を誰れ問ふやつなぎ
し牛に秋の日暮るる(牛)

あたらしき生にわが得し玉杯の歌は
この日も盛るや歡喜(新)

詩や戀や黄泉の闇戸の彼方なる枯れ
し骨如しわが興冷えぬ(骨)

君に別れ長き別れに身は老いぬわび
て二夜を經ぬる千とせに短

さづからず我とわびぬる我なれば死

ぬる怖れじ石にもたれて

われとこそあこがれしめよ燃えしめ
よやらじ巖屋に行かじ氷室に

胸ひたし潮と湧けよなさけあらば破
れにし船も琴と響かめ

遠き世に君をひらけとさづかりし鎗
にはあれどえこそ見出でね